

頃は薄利多賣の大看板を懸けることが大分流行し出したのは誠に商賣上の進歩で結構の次第であるが、果してそれ等商人が其の看板通りの主義に忠實であるか。何うか。若し然らざるものがあるとなれば開は羊頭を掲げて、狗肉を賣るの類で、商業道德の上から大に排斥しなければならぬ。何うかさう云ふ狗肉主義でない本當の薄利多賣主義を一般の商人に依つて實行されるやうにしたものである。然して此の薄利多賣主義を實行するとせば従つて一時の成金的利得を斷念しなければならぬ。

斯く申せば商人は遂に富を積むの期なしと考へるものがあるかも知れぬが大なる誤りである。無論利得の多寡は富を作る上に重要な關係を有するには相違なきも、その多き事のみが條件ではない若し利得の多き事が富を作る唯一の條件なりとせば百圓の利得ある者は容易に富を作り得れども二十圓の利得しかなき者は富を作ることが出来ぬと云ふことになる。併し世間の實際に就いて之れを觀るに、百圓の利得があつても富を作れぬ者もあり、二十圓しか利得なくても富を作り上げたものもある。這是主としてその當事者の心掛に由るものであつて富は決して利得の多寡を以てのみ斷ずることは出来ない。唯だ利得多き人は利得寡き人よりも比較的致富に樂な點はな

いでもないが、併し大きな汽罐は多くの石炭を要するが如く、利得の多きものは従つて多くの支出を要する譯なれば、特別の經濟的節約を行はざる以上、利得寡き者と同じ事情にある。故に富を作るは利得の問題ではなくして自己の經濟的節約にあるのである。而して勤儉は經濟の要訣であつて亦た人の美風である。此經濟の要道を正當に踏みたる者に於て時の富を許し眞の幸福を知らしむべきものである。一攫千金の一時的富の如き畢竟浮雲の富で決して安定を得べき者でない。従つて斯る富から永久の幸福を求めるとは出来ないのである。

私の如きも若し富を作ることを唯一の目的とし、此の目的の爲めには手段の何ものをも撰はなかつたならば或は今日大なる富を積んだかも知れぬ。併し私は老齡の今日まで私慾の行動をなしたる事なく、苟くもその従事し來りたる事業に對する觀念は、國家社會を離れたることなく、従つて一時的過分の利得にあづかる機會が無くて仕舞つた。併しながら私は之れが爲めに人としての大過なく、疚き纏りもなく前の心は常に靜平で斯く餘生を樂むことの出来るのを此の上なき幸福と感謝してゐる。即ち我々の眞の幸福は富に非ずして道である。商人としては商人の踏むべき正しき道、農者として農者の辿るべき直なる道、爲政者として爲政者の行くべき公明なる道を踏む

にある。即ち國民社會人として行ふべきことを爲すに在る。斯くの如き行爲を完成したならば譬ひその人は物質的に貧くても精神的に富たる者と云ふべく、従つて眞の幸福を感じるに相違ない。

然し左様に申したからとて道さへ得れば貧賤でも構はぬと極端に斷ずるものと解してはならぬ。富貴である上に一層徳を修め、智を磨いて道を行ふことが出来ればそれに上越す幸福はない。唯だその富を作る目的とその手段とに對して警誡を加へたに過ぎぬ。孔子も亦た此の貧賤に就いて述べられたことがある。それは或る時弟子の子貢が『貧しくして諂へなく、富みて驕る無きは如何』と質問したに對し、孔子は之れに訓へて『可也、未だ貧にして樂み、富みて禮を修む者に若かざる也』と曰はれた。即ち孔子は貧賤を意とせずして人間の道を行ひ、富貴に高慢ならずして愈々禮を忘れぬ者でなければならぬ。と云はれたのである。道を行ふに貧富の差別はない筈である。而して富に慢らず道を盡す人は最も完全な人格の人と云はなければならぬ。私は諸君に『道を踏む』と云ふ事に常に努力せむ事を希望して止まぬ。

商人と投機

今回は商人と投機と云ふ問題に關して一言を呈することにする。それには先づ投機そのもの、定義に就いて述べる必要があるが、私は何時も言ふやうに元來學者でないから、是れに對して正鵠なる説を立てることは出来ない。けれども姑く予の推測を許容して貰ふならば、予は投機と云ふ語は即ち機會に投ずると云ふ意義に解釋したいのである。

世俗には投機と云ふ言葉を以て直に一か八か、乗るか反るか、乃至一攫千金と云ふやうな、所謂一六勝負的の博奕でもすると云ふ様な意味にも使はれて居る場合もあるやうであり。而して然らういふ解釋が或は當つて居るのかも知れないけれども、併し私は投機の文字を左様に解釋するのは甚だ淺薄の見解のやうに感ぜられるばかりでなく、若しも此の文字が果して左様な意義のものであつたならば、私は斷じて商人と相對して論ずるまでもなく之れを排斥しなければならぬ。

そこで私はこの投機は飽まで機會に投ずるの義で、單に奇利を目的とする博奕とその性質を異にする英語の所謂スピレーションの意味に之れを見たいのである。幸にして私の見解が成立つも

のとせば、私は商人に投機は必要なるものであると主張したのである。然してそれを述べる前に、更に商業とは抑々如何なるものであるかと云ふことを考へる必要がある。

商業の定義に就てはこれ又た投機の定義と同様私は學術的に之れを説明することは出来ないが概して之れを二種に見ることが出来るやうと思ふ。その一つは狹義の商業即ち店頭に商品を並べて之れを販賣することのみ行ふもの若しくは、製造家より商品の委託を受けて之れを販賣する問屋の如きものである。他の一つは廣義の商業即ち販賣若しくは仲介以外に製造をも併せ行ひ、或は製造を主として行ふもの、乃至鑛山事業等に従事することをも同じく商業と見ることである。普通には商業と工業とを二つに別ち、之れを細別して商業には卸賣業、小賣業、貿易業などとなり工業の方では製造業と鑛業とを全然分けて居るのである。

併しながら之れ等の區別は其事業の性質に依つて區分されたるに過ぎなくて、何れも絶つべからざる連鎖を有し、殊に最近商業の傾向は工を加味することが漸次に濃厚となり、而して此の商工の兩者を總稱して實業と云ふやうになつてゐる點から見ても、吾人の所謂商業とは商工を併せた廣義の商業と見るが至當であらうと思ふ。従つて私の茲に投機必要論も、此の廣き意味の商業に立脚して述べるのであると云ふことを豫め承知して置いて貰ひたいのである。

却説人間社會の何の仕事でも世運の進歩に伴つて複雑多様になるのは免れぬ勢ひであつて是れが亦たその事業の進歩であることと言ふ迄もない。殊に商業の如く、人生生活に直接の關係を有する事業にあつては世の進運に伴ふと云ふよりは、寧ろ世運を促進する使命を具有するだけそれだけ段々複雑になるのは當然の成行きと言はねばならぬ。昔時の商業の物々交換から僅かに消費供給兩者の間に仲介する程度に於て満足したる時代は内容極めて單純なものであつてその經營に格別骨が折れずその取引にも大した才覺を要さず、或る商業は暖簾を大事に守り、賣買に丹精さへすればそれで立派に立つて行かれたものである。否今日にあつても、此の種の階級にある商業は全くないでもないが、それでも四圍の關係及び經濟事情が複雑になつてゐるから昔時の如く單純遲緩なるを許さぬものがある。例へば小賣商に就いて觀るに、昔の商業は暖簾が直に俗に言ふ株のやうなもので、容易に他の競争を容さず、不都合のない限りは他の壓迫を受くることなくしてその繁昌を維持することが出来るのである。處が今日の商業はそのやうな簡單なやり方ではな

く安心して居ることが出来ない、成程暖簾と云ふものは今尙商店の信用に相當なる威力を有するものに相違ないがそれもその暖簾に相應する努力が伴つて始めて有利なる効果を齎らすものであつて、進歩したる世人は徒らに美しき包装を見て不利なる中味を購ふやうな愚かはしないのである。されば如何に暖簾が古くても之れを株の如く考へ頼むことが出来ない上に、一方市場の自由競争が烈しくなつて少し油断をすれば直に他の乗する處になつて自家の存在が危険になると云ふ有様であるから、自然之れが經營には昔時それ程重きを置かなかつた智慧才覺がより多く必要になり、勉強努力もより多く有要になつて来る。況んや近世商工一致の體の下に社會の進歩開發に貢獻しやうとする商業經營にあつては、その事情の複雑多様にして之れに要する智識と努力の更に甚大なるものゝ無くて叶はぬことは絮説するまでもないのである。即ち今日の商業は廣義の商業であつて、亦た廣義の商業でなければ商業その物の發達を望めないばかりでなく、世の進運に貢獻することも出来難いのである。

以上の意味から予は製造及び採鑛乃至石油の如き鑛山事業をも同様商業の範圍内に置くに至當と考へるのであつて、此の見解にして過ち無しとせば、そこに商業には投機が必要である理由が生じて來るのである。

商業は品物の賣買以外、事物の開發に任すべき使命を有するものとせば、智識の應用と相俟つて多少の危険を冒さなければならぬ。而して此の危険を冒すと云ふことが投機になるのである。例へば蒸汽機關發明者たるワットの如き最初は彼の發明に對する世人の態度は極めて眞面目を缺き、彼目して山師でなければ狂人なりとまで沙汰したのである。實際に於て彼には不拔の確信はあつたであらうが、併しながら神ならぬ彼の事業はその結果を得て始めて證明せられたのであつて、それまでは一種の投機たるを免れぬのである。之れと同じ意味に於て、商人が事物の開發に貢獻しやうとすれば何うしても新智識の應用に依つて望みを將來に俟つ處の仕事に着手しなければならぬ。即ちより良き方法を工夫し、より善き品物を製造して自他を利することに努めなければならぬ。そこで然う云ふ希望の下に計畫した仕事が果して實現し得るか否かと云ふ處に一部の危険が伴ふのであつて、而して此の危険を冒すことが即ち投機といふことになるのである。然れども此の投機の危険は、彼の盲目的猪突的の博突的の危険ではなくて、理智ある確信ある冷靜な數理的の計畫に依つて押へられて居る危険であつて、之れを賭博の危険と同一視することの出來

ないのは勿論である。詳言せば今一商人が石油を採掘するとする、昔ならば斯ういふ仕事に従事するを極めて危険なりとし、その人を以て山師なりとして眞面目に之れを受取らなかつたのであるが、斯道の智識が進歩するに従つて、その危険の程度が大に減殺せられた今日は、最早之れを山師の仕事などと貶す者なきは勿論、却つて大に有利有望なる事業と了解して喜んでその投資に應ずると云ふ有様になつてゐる。併しながらその石油を掘つて果してそれが出るか出ないかと疑問で、なるほど掘鑿に従事する迄には出来得るだけの調査を遂げ、大丈夫との見越しをつけてから着手するのには相違ないが、そこが神ならぬ人の智慧才覚に依つて數百尺の地底を判断するのであるから聊かの危険をも考慮する必要なしとは言ひぬ、然れどもその危険ありとして之を遂行しなければその事業も進まず、世の發達をも期されぬことになる。そこで危険を冒さなければ有利の結集を得ることが出来ない、それには其の危険に罹らぬやう豫め用意することが肝要で、而してそれを究めるのが智識の力と云ふことになる。然らば投機と云ふことは商業には甚だ必要なものであると同時に、その投機は科學的な數理的な極めて確信ある計畫の下に營まるゝ事業に於てのみ容すべきものであると言はれやう。

右は投機と商業の關係に於ける大體論に過ぎないが、此の間の消息を翫味すれば今日何れの商人も必ずや大なり小なり投機を行ひつゝあることが解し得られやうと存するのである。即ち昔ながらの仲介的商業を營む小賣人にあつても良い品物を廉く賣つて顧客を利し自らも利さうと云ふことが理想である以上はそこに投機を試みる必要が生じて来る。例へば品物を廉く仕入れるには多く纏めねばならぬ。多く纏めれば賣ることが困難になつて来る。併し良い品物で値ひが廉ければ屹度賣れるであらうと云ふ見込みで多くの仕入れを斷行する。之れが一種の投機である。賣れるであらうと云ふことは先きを見越した想像で實際賣つて見なければ解らぬことである。然れども見込みには理由がある。確信がある。そこで投機的の仕入を斷行すると云ふことになるのである。故に博突ならざる投機は寧ろ商人には必要なりてふ結論になる。蓋し我が國既往五十年の急速なる發達は、實に此の理智あり確信ある商業の投機斷行に與る處甚だ大であつたのである。

商人と銀行

今回は商人と金融機關の關係に就いて一言する。凡そ商業と金融機關ほど密接の關係を有する

ものはないと思はれる。

二〇二

今日如何なる事業にても金融機關と關係なくして之れを經營することは殆ど不可能と云ふことが出来やう。若し強いて金融機關を無視して商業を經營するとせば、恰も昔時野蠻時代の物々交換をなしたると同様の不便を生ずるであらう。斯くの如き商業に何等の進歩發展を招かざることには曠味時代のそれを見ても知れる。

古昔に於ける商業進歩の消息に就いては予は未だ之れを詳細に知らぬけれども、貨幣の出来と共に發達し來りたることは疑ふべからざるものゝやうである。而して此の貨幣は何時の時代に何を標準として定めたかも知れぬが、最初は貝殻の如きものを貨幣に使用したものだと言ふ歴史家に依つて立證されてゐる。されば貨幣の『貨』の字を兩斷すれば貝が化するととなり、貧乏の『貧』の字は貝から分れることになり、『賤』の字の貝の脇に戈が二つあつて此の二つ戈で貝から離される事になつてそこで賤い者になると云ふやうな字義がある程それ程貨幣は昔時から貴重なものに取扱はれてゐたのである。

然り而して此の貨幣の由來は物々交換の不便を避け、以て需要供給の圓滑を計らんが爲めであ

ることは言ふまでもないことである。然らば貨幣は或る兩者の媒介及び物々の爲すと同時に物の價の標準にもなるものであるから、その自體は元來有價值のものでなければならぬ。若しも貨幣にして有價值のものでなければ、品物との權衡を保つことが出来ないばかりでなく新に有價值の貨幣が現はるれば既往の貨幣は忽ちその價值を失ふて仕舞ふ。是れ貨幣が段々と進歩して來た所以である。即ち我が國の如きも兩本位とか銀本位とか亜いで金本位等になつてゐるが、之れは極めて賢なる事で、未だ歐羅巴など何等の交渉もなき時に於て既に金を貨幣の標準としたのは全く有價值ならざる貨幣は經濟上不利であることを感じたからであらう。

既にして貨幣の出来に依つて商業は便利となり貨幣利用の頻繁なる程商業の旺盛を來たすことになる。然して貨幣は之れを死藏すべきものでなく、活用すべきものであることは本誌の讀者に對して絮説を要さぬ事で、『金は天下の廻り物』の諺通り絶えず有効に融通されることに依つて經濟界の調節が圓滿に行はれるのである。例へば商人が商賣するにも自身の金ばかりを資本とする場合は其の規模も範圍も甚だ狭小を免れぬばかりでなく、斯くの如きは恰も物々交換時代の商業と相距たること遠からざるものである。そこで他人の金をも自家に利用するの必要を感じて來る

が、之も自分自身で金を搜す事は困難であるから、金は金を専門に世話する銀行と云ふ金融機關が生れ、こゝに愈々各分業が成立して商業の完備を見るに至つたのである。されば此の兩者を身體に例て申さば筋肉と血液の如き關係になる。商業は銀行と離るべからず、銀行は商業と絶つべからず、兩々相俟つてその職能の遂行に努め、其の繁榮を樂しむべきものである。即ち銀行は貨幣の散集を専門に司どり、而して商人に力があればその金を如何やうにも利用し、自分の金評りでは一年に一度か二度しか繰返せぬものが、銀行の金を利用することに依つて四度も五度も繰返すことが出来るほどの利益を擧げ得ることになり。銀行も又それに依つて多くの利益を收めることが出来るので寔に兩者の幸福となるのである。斯くの如く商業と銀行とは離るべからざる連鎖につながれ、相互に利益幸福を領すべき約束にあるけれども、一朝兩者の間の遣り方が悪いと意外の弊害を醸し、便利の銀行は却つて不便利の機關となり、爲めに理想通りの効果を奏し得ぬのみか時に恐るべき害悪を流すことがある。

例へば銀行業者が商業と云ふことを理解せぬ爲めにそれほど心配せんでよい事をも甚だしく不安に感じて商人の要求を無氣に拒けるが如き、或はその反對に信すべからざる事柄を過信して過

度の資金融通を執行するが如き何れも輕卒の業であつて商業に及ぼす不便不利は鮮尠ならぬのである。同時に商人自身も、自らの力を計らずして銀行を過度に利用せんと欲するは甚だ無謀の業であつて、斯くの如きは銀行の利用と云ふよりは寧ろ悪用に類するものである。銀行としても左様の要求に應じて居たならば如何なる大資本を有するも立ち行かぬ譯であるから、兩者とも其の程度を超越せざる範圍に其の利便を分たねばならぬ。

併しながら銀行は金融機關である以上商況の如何に依つてこれが調節に對して大なる考慮を拂ふべき責任あることを忘れてはならぬ。平時平和な商況にあつては兩者の間に何も面倒がないが一朝非常の波瀾が商海に捲き起りたる時こそ、銀行の措置如何は直ちに以て時態に重大の影響を與へるものである。或る場合には金融業者の働きに依り、其の波瀾を鎮めて眩惑困憊せる商人を救済することも出来る。故に商人と銀行業者とは常に相信頼し、相了解し、其の智識を適合して各職能の遂行に盡瘁しなければならぬ。

手近い例が此の數年以來は戰時の爲めに經濟界の平準を失し、商人は其の經營が大規模となり銀行業者も世間の好人氣に動かされて利率の割さへよければ永久的の仕事でないものに對しても

過度の金融に應ずると云ふ有様であつたが、一度戦争が終熄して商況頓みに沈滞せんとし鐵、運輸方面の株券は早くも五分の一程暴落せるを見るや、銀行者は周章狼狽して極端に貸出しの回收に努め、融通の手を締め、之れが爲めに商人は足搔を失ふて銀行の不都合を鳴らすと云ふ状態は隨所に見聞する。是れ蓋し兩者の不用意から來つた當然の結果に外ならぬ。

されば商人と金融機關は不分不離の因縁を有する大切の關係にあるけれども、之れを悪用せば容易ならぬ害毒を起すことを知らねばならぬ。恰も吾人の身體に血液は瞬間も缺くべからざるものであるけれども、之れが平準を失せば遂に恐るべき充血若しくは貧血症を起して爲めに一命を損ずるの大事を惹起すると同様である。又銀行業者にしても其の通りで自らの不用意の爲めに過度の融通を爲して却つて兩者の禍ひを大ならしむることの愚なると同時に、餘りに周章して風聲鶴唳に狼狽するの痴態を避けねばならぬ。事に警戒するは結構なれども警戒にも亦二つの意味あることを忘れてはならぬ。不況に對して警戒と順況に對する警戒である。若しも我が銀行者が、最近の順況に對して充分の警戒を拂へたらんには恐らく今日の狼狽は無かつたであらうと思はれる。殊に自己の立場を守るに急にして爲めに、遮二無二警戒の手を締めて波瀾に感濁せんとして

つある者を見殺しにする如きは誠に面白からぬ事柄である。若しも銀行者のすべてが斯くの如き態度であつたならば、現下動搖しつゝある我が經濟界の或る部分は甚だ憂ふべき結果を出現するであらう。自己をのみ先にする事なく一國の大勢から打算して之れを善解するの精神を以て努力されたいものである。

商人と成敗

社會の上位に立つて時めく處の人達が、偶々その半面に暗い影の存することが曝露されると、氣早の青年達は成功には必ず罪惡の伴ふものゝやうに即斷するのである。現代の大商人大富豪の中には今日の身分や地位を造り上げるまでには種々なる経路を経て随分衆人羨望の的となり、鬼角の評判も受け、甚だしきは人身攻撃までやられる者が少なくないやうである。斯うした例を見て青年達は直に、『惡事でなければ成功されぬもの。今の世の中は悪人榮えて善人亡ぶ』など云つて、廉恥心を以て人間の最大要事と信じてゐた彼等は、爲めに大に疑ひを起す者があると聞く是れ青年の將來の爲めに云ふよりは國家の前途に對し大に憂ふべき事柄である。

昔から、天道是か非かなぞと申す言葉もあつて、古人も矢張り順逆顛倒の事實に對して大に天命を疑つたと見ゆるが、然し今日の世の中に果して其の様に矛盾した現象が存在するであらうか。善人亡びて悪人榮え、正道廢れて邪道興ると云ふ、そんな間違つた事實が眞にあるであらうか。此の問題に對して世人は如何に觀てゐたかは知らぬけれども、私は斷じて然らずと言ふことに躊躇しないのである。蓋し、世人の觀察と、私の觀方とでは根本に於て異つてゐる所があるからだ。私は今日まで未だ善人の亡びたることを聞いたこともなければ、悪人の榮えたことを見たこともない。世人が目して悪人なりと攻撃しつゝある人でも、その事柄が發達向上すると共に何時か善人になつてゐる。又た曾ては正しからぬ手段で財物を蓄へることに熱中した人でも、その目的が達せられると之れまた善人たるに背かぬ行ひの人となつてゐるものもある。斯れば人は徹頭徹尾善人が亡びて悪人が榮えるものでなく、天道は畢竟是なるものであることを確信して疑はぬものである。

世の中には飽まで惡果を積んで得々たる者のないでもない併しながら惡事に依つて得たる仕合せは決して眞の仕合せでないのみならず、左様の仕合せは必ず永續せぬものである。縱令や物質的に零落はせぬまでも、精神的に社會から葬られるものである。何人にも良心がある。此の良心は何時も昭々として明かな筈である。彼等が惡事を敢行なさんとする時、良心に受ける刺激は果して如何であらう。積惡非道の兇人でも、天命を知りて良心の呵責に堪えざる時、彼や翻然として善なる性に立歸るが常である。鳥の方に死なんとするや其の聲悲し、人の方に死なんとするや其の言可しで、世の有らゆる惡事を働き盡した人鬼でも、いよ／＼最後の宣告を受けて斷頭臺に立つべき日の近からんとする時、彼は全く浮世を超越した一個貴き人格者となつて仕舞ふと云ふことだ。されば人間の一生を通じて惡を以て終ると云ふことは先づ以てないものと見なければならぬ。

惡事を働いて金を儲けた如く世間から見られる人々は、或は一時は左様に言はれるやうな事をなしたかも知れぬ。又た實際吾々の見聞する所でも、詐欺的方法を用ひたり、或は賄賂を送つて其の筋を誤魔化したたりして一攫千金を得ると云ふやうな例は世間に少なくないのであるから、世の成功者と稱せられる富豪はすべてさうした不正手段で金を蓄へたものでないかと疑はれるのも無理はない。併しながら、人間は誰れでも惡事を行ふと云ふものではなく、又た何時も惡事を行ふ

て恬然たる者は少ない。縱令一時は悪人と目せられた者でも、前に述べたやうに良心に省て何時の間にか善人に化して仕舞ふのである。然り然らば成程一時は悪人であつたにせよ、それを後悔して善人になり、善果を積んで既往の悪事を補ふ處があるならば、是れ『過つて改むるに憚ること勿れ』で、最早其の者の罪を徳義的に責める餘地はないのである。若し又彼等にして何時までも悔悟することなく、徹頭徹尾悪人を以て終らんとする者があるならば、それは道理上彼は必ず亡びねばならぬ運命にある。天地間の事物はすべて正當に行はれてゐるものである。天道は何時も正義に與して渝らぬものである。

よく悪運と云ふことを人は言ふが、世の中に悪運なぞと云ふものが、存在する筈はない。若し悪運が強くて成功したかのやうに見える人があつたならば、开は僥倖にして免れてゐるので、此のやうに不確實な運が何の保障をなすことであらう。一度正義の風が吹けば根柢から覆へされて仕舞ふのである。『不義の富貴は浮べる雲』とは眞に此の間の消息を道破した警句である。

一體人を観る上に、單に成功とか失敗とかを標準にして計るのは根本からの誤謬であるまいか。成功と言ひ失敗と言ふは僅かに働きの結果に過ぎなくて、人間にはそれ以上に貴きものがなければ

ばならぬ筈だ。曰く『人たるの務』即ち『人道』これである。我々は此の人道を無視しては存在の意義をなさないで、人間の標準は何うしても此所に置かねばならぬ。我々は先づ何よりも人たる務めを先にし、道理を行ふて世を益し、而して此の間に己をも立て、行くと云ふことを理想としなければならぬ。

今日は道理の世の中である。生活改善と云ひ、文化生活と云ふも皆道理に適はざる事を道理に適ふやうに改造しやうと云ふのである。力を以て横に車を押すことは容されぬ世の中である。道理を外にしたものゝ存在は斷じて許容されぬのである。斯る世界に意義ある生活を行はふとするには、所謂成功や失敗の如きは全く問題外で、假に悪運に乗じて成功した者があつてもそれは無價値有害なる成功で、人間として寧ろ之れは憫むべき境遇にあるものである。又た善人の中には運拙くして失敗した者があつても、それを以て悲觀するには當らぬ。唯だ人に人たるの務めを完ふすることに依つて貴く自己の責務を果すことに依つて安ずることを得るのである。斯く觀じ來れば彼の成功失敗の如きは謂はゞ丹精した人の身に殘る糟粕のそののやうなものであることを知るであらう。

茲に一挿話がある。それは私の少年時代に父が訓戒の例話として度々語り聞かせたことである。當時私の實家の附近に、極めて謹直な勉強家の爺さんが住んでゐた。此の爺さんは非常な働き人で、朝は寅の刻に起き、夜は子の刻に臥すると云ふ位に、年中不斷にそれはよく家業に出精した。その結果として當然相當な分限者になつた。けれども彼は貧乏な時と同一の心持で、金が出来たからと云つて奢侈に耽るやうなことはなく、相變らず朝から晩までせつせと働き通したので、近所の人達は不思議に思つた。爺さんは何を樂みにあゝして眞黒になつて働いてばかりゐるのであらうか。たまには遊山をしたり、甘い物を食べたりしたとて障るほどの身代でもないのに唯だ稼いでばかりゐるのは何所まで慾の深い人か底が知れぬなどと悪口を言ふ者もあつた程だ。そこで或る人が此の爺さんに向ひ『貴方は最う大分財産が出来たのであるから、いゝ加減にして老後を遊んで暮しては何うか』と聞いて見た。その時爺さんの曰くに『俺は勉強して自分のことを整齊してゆくほど世の中は面白く楽しいことはない。俺は働くことが何より幸福に感じ、而して働いてゆくうちに働きの糟が出来る。これが世に謂ふ金銀財寶であるが、俺は必ずしも此の身後に残る糟粕を求める爲めに働くのでもなければ、従つて又たそれを意にかけても居らぬ』と言つたさう

である。そこで私の父は、これを一野人の言として聞き流して仕舞ひばそれまで、あるが、併し此の戲言に等しき中にも一道の眞理はある、無限の教訓が含まれて居ると思ふ。と屢々私に誡めの例に引用されたのであるが、今に至つて此の話を考へて見ると、成程と思ひ當る節々が多くあるのである。即ち現代の人は唯だ成功とか失敗とかいふことを眼中に置いて、それよりもつと大切な天地間の道理を見て居ない。人たるの務めを忘却して居る。彼等は實質を生命とすることが出来ずに糟粕に等しい金銀財寶のみ主としてゐる。此等の人々は此の無學なる爺さんに對して愧づべきではないか。

これまでも屢々話たことであるが、私なども若し物質の成功者たらんことを欲したならば、或はある程度までの富豪になれたかも知れぬ。併しながら斯くの如きは私の良心の許さぬ處で、自ら考へて正しと信じたことでなければ行ふことをしなかつた。苟めの事業を始めるにも、それが世を益し人を利すると云ふことを標準として自己の利害など顧みる邊がなかつた。従つて私は物質に富むことは出来なかつたけれども、何等心に疚しきことなく、今日猶ほ世の爲め人の爲めに餘生を捧げて立ち働いて居ることを愉快に感じ且つ幸福に思つてゐる。或は亦た私が物質に成功

しやうとしたなら失敗を招いてゐるかも知れず、又た成功しても今日得てゐるやうな愉快と幸福とを享有することが出来なかつたかも知れぬ。いやそれに相違なからうと思つてゐる。

廣い世間には、成功すべくして失敗した例はいくらかもある智者は自ら運命を開拓すると聞いてゐるが、實際運命のみが人間を支配するものではない。智慧がこれに伴ふて始めて運命を開拓することが出来ぬ。如何に善良なる君子人でも、智力が乏しくて、いざと云ふ場合を踏み外したならば最早成功は覺束ないのである。例へば豊臣秀吉と徳川家康とを對立して觀るとよく此の事實を證明してゐる。假に秀吉が八十歳の天壽を保つて家康が六十歳で死去したとしたなら如何であつたらうか。天下は徳川氏の手歸さなくて却つて豊臣氏萬歳であつたかも知れぬ。然るに數奇なる運命は徳川氏を助けて豊臣氏に禍ひした。單に秀吉の死期が早かつたのみならず、徳川氏には名將雲の如く智臣林の如く集つたるに對し豊臣方には淀君の如き嬖妾が權威を恣にし、六尺の孤を托すべき誠忠無二の賢臣且元は擯けられ、却つて小人大野父子等が重く寵用されると云ふ有様だつた。加ふるに石田三成の關東征伐の一舉は豊臣氏の自滅を早むるの機會を造つた。此の場合果して豊臣氏愚なるか、徳川氏賢なるか、私は徳川氏をして三百年太平の霸業を成なしめたも

のは寧ろ運命の然らしむる所であつたと判斷するのである。併しながら此の運命を捉へることが亦た甚だ難かしいので、常人は往々にして際會せる運命に乗するだけの智力をを缺いて居るが、家康の如きは其の智力に於て到來せる運命を捕捉するに頗る賢であつたのである。

要するに人は誠實に努力勤勉して運命を待つに如かぬ。若しそれで失敗したなら自己の智力の及ばぬ爲めと斷念し、又た成功したなら智慧が活用されたとして成敗に抱はらず天命と安んずるがよい斯くの如くして破れても飽まで勉強するならば何時かは再び好運命に際會するの時が来る。人生の行路は様々であつて、殆んど一律に論ずることは出来ないものであるから、時に善人が悪人に負ける如く見えることもあらうが、これは原則に適はぬ變態の現象で、長い間には善悪の差別が判然して悪は亡び善が榮えることになる。公平なる天は必ず善なる人に幸福の運命を開拓せしむるのである。

功名心

世の中には楯の半面ばかりを見て、事の是非善惡を定めやうとする人がある。無論これは間違

ひである。例へば、石炭酸は時に人の生命を絶つほどの恐るべき劇薬だと云ふことばかりを知つて、只管これを排斥するは、他に有要なる機能あることを知らぬ人である。人間の功名心に對する世人の態度も往々これに類するものがある。即ち人に依つては、功名心と云ふものを大變に嫌忌する風がある。斯う云ふ人の解釋によれば、『功名心は單に功名を造つて自己を輝さんと欲する慾望である。利己的の名譽心である。故に此の慾望を果さん爲めには手段を擇ばぬ弊に陥り易い。』と云ふのである一應は尤ものやうであるが、併し、功名心は説者の云ふが如く單に功名を造つて自己を輝さんと欲する慾望であらうか。利己的の名譽心を満足させるだけのものであらうか。少なくとも私は此の解釋に服することは出来ないのである。

私の積ふる所では功名心は人間に取つて最も尊重すべきものであると言ひたいのである。何となれば、私共に功名心と云ふものを取去つたならば、個人の向上發達の觀念を著しく減殺することになり、従つて事物の進歩上進を妨ぐることに思ふからである。抑々私共が自ら修め自ら研ぎ、自ら努力する所以のものは、功を積み名をなさんと欲するが爲めである。孝經にも『身を立て、道を行ひ、名を後世に揚げ、以て父母を顯すは孝の終なり』と云つて、私共に斯う

した功名心が無ければ到底世に立つことは出来まいと思ふ。而して私共の所謂功名心はさうした性質のものでなければならぬと信するのである。果して然らば私共の功名心は、人生と常住不離の關係にあるもので、これあるが爲めに私共は向上し、國家社會が進歩してゆくのである。故に私共にして假初にも功名心を棄てるやうなことがあれば、その時こそ人間の前途に鐵柵を構へるやうなもので、何の張合ひもなく何の興味もなく、誠に味氣なき世に不満の果ては自暴自棄に赴かねば止まぬことになるのであらう。

歐洲の天地に獨帝が世界的の功名心から演じた乾坤一擲の大賭博が美事失敗に終つて以來、著しく功名心の評判が悪くなつて、苟しくも自己を本位とする計畫の下に聞名を馳せんとする慾望は、共同生存を理想する所謂社會文化の主旨に適はぬものとして排斥されるのであるが、开は功名心が左様に自己本位の慾望から出發してゐるものに對してのみならずべきもので、道理に適ふた功名心であるならば、決して排斥される理由のないばかりか、却つて大に獎勵しなければならぬものである。成程功名心もその意義を穿き違へると弊害を生ずるに相違なく、その極奸邪、詐欺、騙瞞等の陋劣醜穢の手段も講ぜられることにもならうが、それは功名心に道理が伴はない爲めで

ある道理を離れた功名心は、孟子の所謂『仁義を後にし利を先にすれば奪はんずば厭かず』に落ちゆくのである。然して人は動ともすれば功名につきて其の原因を糺さず唯だ結果ばかりを求め、る事に焦心するから遂に道理の埒を踏み外す場合が多い。故に斯うした半面の事實をのみ見て居る世の道德論者は、甚だしく功名心を卑下し、必竟人生に功名心あるが爲めに、奸邪、詐欺、騙等、騙等の醜事が生ずるのだと極めて仕舞つて大に排斥の氣勢を揚げて居るのである。就中禪味を帯びた宋朝學者、即ち朱子學派の如きは一層甚しく功名心を嫌忌すると云ふよりは、これを激視して撲滅しやうと努めてゐることは種々なる書物に散見されるのである。併しながらこれが抑々誤解を生ずるの源となつた。

私は元來、仁義と利殖とは兩立して而かも離れざるものであると説く一人であるが、所謂儒者は大に解釋を異にし、君子賢人は功名を意とせぬとか、名譽の事を口にすることは仁人君子に非ずとか云ふて、全く功名心を放棄してゐる。けれどもこれは儒者が利殖を卑下すると同一義の誤解である。又た今日の人達が、文化生活と功名心とは相容れぬとなすのも、畢竟功名心を私利我慾の欲求と解するからであること前者の謬想と選ぶ所がないのである。然り然らば、道理に伴はぬ功

名心が専ら惡結果を生むからと云つて、直ちに功名心の全體を唾棄するは、私の所謂權の半面だけを見ての判斷で、決して當を得た正論とすることは出来ない。實際に於て弊害ばかりを擧げて有益の方を顧みなかつたならば、天下には殆んど善事がないことになる云つてもよいであらう。

私は以上の意味に於て道理正しき功名心は個人にも社會にも甚だ必要となすものである。私共はこれあるが爲めに世の中は楽しく、自らは尊く、勉強心も發すれば、奮發心も起るのである。彼の禪學者流が自ら功名心を忌はしとしてこれを擯斥するけれども、然かも禪の『恬淡』とか、佛の『一切空』とかいふ境地に達するまでには、彼は矢張りそこに達したしと希ふ所の一種の功名心が含んで居るに相違なく、又たこれ等の人々にして世に名僧智識と稱せらるゝ程になれば、即ちそれは『功』が成つたものと言ふことも出来やう。必ずしも戦争に勝利を得たことのみが功ではなく、金儲けに達したことが成功ではない。佛者の功德も功であり、又た悟入眞諦眞髓なども等しく功であつて、これを知りこれに達したいと希ふ心は即ち功名心でなくて何であらう。故に儒家や佛者が功名心を只管に排斥するは殆んど謂れなきことで、彼等は自ら自身をも嘲つて

居るに等しきものである。

斯様に觀じ來れば、功名心は道理正しき慾望と云ふものになる。然して人間は何等慾望なくしては生くることが出来ない、慾望のないのは目的のないもので、目的のない者は、一生を擧げて醉生夢死に終る外途がないことになるから、私共は寸時も功名心を忘れてはならぬ、遠ざかつてはならぬ。より大なる功名心を抱いてその目的に勇往邁進しなければならぬのである。

以上の如く功名心は私共と瞬時も離るべからざる大切の慾望ではあるが、然かもこれが實行上に一步を過ると甚だしき弊害を醸すものであること前述の取りであるから、苟しくも正しきに背く思料や手段に訴へてはならぬ。理に従つて道を行ふ意を心として進まなければならぬ。然らざれば功名心は反つて自らを傷ひ、世に禍ひすることになる。世の中には我慾の功名心に驟られて居る者も決して少なくないが、左様な功名心の満足に達成される筈はなく、縦令や達成したにしてもそれは何等の尊貴をなさぬものである。目的の爲めに手段を擇ばぬと云つたやうな考へは、文化生活の道理の世界には容されぬので、さうした手段に由る成功があるとすれば、それは僥倖にして免れた社會人道の埒外に置かるべき恥ざらしである。斯の如き功名心は大に排斥しなければ

ならぬ。

此の意味に於て私は今日少青年諸君の功名心に對して一層の注意が促したい。特に地方の少青年諸君に對してその感を深ふするものである。蓋し地方の少青年には往々誤れる功名心を抱いて郷國を去り、何等の確信なくして都會に趨る結果、遂に救ふべからざる弊害を醸すに至る者が尠なくないからである。

由來少青年期は感情に驅られ易い時代で、無暗矢鱈に他人の成功を羨望して止まぬのである。一度羨望を感じれば矢も楯も堪らず所謂意馬心猿に鞭ちてまつしぐらに都會へへと馳せ參ずるのである。彼等は何でも成功するには都會へ出なければ駄目だ、田舎に居ては仕事もなければ仕事も出来ない廣い世界の都會へ出かけてゆけば何か仕事はあるであらう。何とかして成功されるであらう。現に先輩は都會に出て成功してゐる彼も人なり我も人なり、而して彼が成功したのに我の成功せぬ事あらんやと云ふ空想を背負ふて出かけて來る。然かも先輩は如何なる理由により、又た如何なる往路を踏んで成功したかと云ふ事は究めず、單純に功名とふ結果ばかりに眩惑し、極めて淺薄なる考へから故郷を飛び出して仕舞ふのである。それでも、幸にしてそれ等の青

年達が結局成功すれば結構であるが、左様の人達は得て成功し難いものであるから、忽ち其の目的は外れて終生功名心の犠牲に供しなければならぬやうな破目になる。これ實に功名心から來る所の弊害の一種で、斯る種類の人々が終には奸邪、詐欺騙瞞を働きかねまじきものとなるのである。

斯く云ふたからとて私は強ち地方青年に功名心を抱くべからず、都會へ出づるべからずと申すのではない。道理の伴なつた功名心の必要なることは前に述べた通りで、地方の青年達も大にこれを有さなければならぬ。又た充分の理由があり、確信があるならば都會に出かけて來るも差支へはない。理由なければ確信もなくして漫然功名心に驟られて飛び出すことを否とするのである。少し問題を逸するやうではあるが、地方の青年達が功名心に煽られて都會に出ることは文化普及の上にも地方政策の上にも甚だ好ましくないことである。國家勢力の大部分は地方勢力であつて、國家政策の大部分も亦た地方政策である。それほど地方の勢力如何は國家の消長盛衰にも係はるのであるから、私共は只管地方文化の發達を冀はねばならぬ。故に出來得るだけ有爲の材幹を分布して之れが涵養伸張を計らねばならぬのであつて、此の意味から折角有爲の青年が都會に

駆出して來る如きは決して策の得たものではない。諸君がその郷土にあつて、その郷土を改善し向上せしむる爲めの功名心と働きとは、中央に大臣となり宰相となつて天下に號令する名譽と尊貴にも譲らぬ最高至上のものである。此の意味からして地方青年が都會に學んで漸く業成るの日早くも都會の水が泌みてその郷土に歸るを厭ふの風あるは地方發達の上と云ふよりは國家全體の進運の上から太だしく遺憾としなければならぬのであつて、彼等は進んで地方郷土の文化普及の任に當られたきものである。今日は地方民諸君も段々と時代に諒解を持つやうになつて、經濟的にも政治的にも思想的にも進歩の跡を示して來た事は幸ひである。就中其大部分の人達が時勢と浚交渉の觀があつた農村にも、此頃農村文化なる語が高調せられるやうになり、青年團などが大に活動盡力するやうになつて來たのは國家社會の爲め重上の義と申さねばならぬ。青年は常に國民の中堅であつて、國家隆頹の責は大部分青年の双肩に懸ると申しても差支へあるまい。此の重大責任ある青年が、空漠たる功名心に驟られて惜ら有爲の一生を失意絶望の淵に投げる如きも慎まねばならぬ。

之れを要するに、功名心は人間に取つて最も尊ぶべきことであるけれども、而かも亦人をして

過ちを多からしむる因を爲すものである。我れは功名に憧るゝ人は徒らに其の弊に陥らぬやうに慎重なる考慮を以てしなければならぬ。然して功名を思ひ立つ人達の第一に考へねばならぬことはその目的の確立である。一體功名と云ふ希望に對して目的と云ふ對物が無ければならぬので此の目的がなくして、功名ばかり希つてもそれは寝て居つて金儲けがしたいと望むやうなものである。我は是れを爲して成功しやうと云ふ慾望が歴然と定まつてゐなければならぬ。第二には、自己は自己の功名心に應ずるだけの才學があるか何うか、能力があるか何うか、更に位置は何うかと云ふことを自己の智力に由つて判断することが必要である。如何に慾望の目的物はあつてもそれを達することに必要なる才學及び能力がなく、且つその位置が不便なるものであつたならば山嶺に攀ちて月に達せんと欲するも同様に、その努力は寧ろ一場の滑稽劇に類するものである。ところが世の功名心に馳せる若き人達には此の滑稽劇の演者が案外に多い。目的もなく自らを憚らず唯だ心中に空中樓閣を描きて漫然都會へ出かけて来る人達の如きは大抵此の滑稽劇の役者たるに終るのである。世の中には大した學問もなく、格別の才能もないやうな人で功名手柄をしてゐる人もないではないが、併しそれ等の人達の成功の徑路を辿つて見ると却々常人の及ばぬ足跡

が印せられてゐる。漫然空然富籤を引き當た如き成功者は斷じてないと云つてよ。

併しながら、功名心の弊害は假令そのやうに有勝のものであるにしても、その爲め功名心その者を惡しとして拒絶するわけにはゆくまい。何となれば功名心の弊害は輕佻浮薄なる青年に由つてのみ愆らるゝ結果であるから。故に若しその功名心の對物たる目的が定つて居り、之れを遂行する才能も伴ひ、且つその目的物も又た目的に進む手段方法も道理に適つた善なるものであるならば双手を擧げて賛成する。

反抗も必要

何事も過ぎたるは及ばざるに如かずで、物には自ら程度がある。人間の從順と云ふこともその通で、柔順は固より悪いことではないけれどもその度を過せば盲從となり卑屈となる場合がある故に我々には服従の觀念の大切なることは勿論であると同時に反抗の氣概も閑却することが出来ないと云ふことになる。

一口に服従と云へば如何にも從順の徳を具へた美しきものゝやうに考へられ、反抗と申せば何

か荒々しい舉に出るやうにも見做されるのであるが、併しそれは程度問題で、時に服従必ずしも善ならず、反対必ずしも悪ならざる場合のあることを知らねばならぬ。故に私は以下少しく服従と反抗との利害に就いて述べて見やうと思ふ。それには先づ服従とは如何なるものかを見定める必要がある。

さて服従と云ふことを事細かに見て行つたならば、その範圍は廣汎であつて、斯る冊子には述べ盡しがたいかも知れぬが、今之れを簡単に通俗的に申せば、人に使はれる者が、主人若くは目上の人の言に服すること、子弟たるものが父母又は教師の訓育に従ふこと、家族が家長の命令に従ひ又は、家法を守ることに、之れを大にして國民が國憲を重んじ、國法に従ふことなどが服従の意味に含まれてゐるのであらう。果して然らば吾人には必ず服従がなくてはならぬこととなる。併しながら、此の服従も、その服従すべき事柄の是非を辨へず、一讖にも及ばず他人に同意したり又は阿諛諂諛する如きは餘り感心することが出来難いのである。詰り極端の服従は、極度の逆合を事にする結果、心にもなき追従阿諛を敢てする卑屈の行爲になるのである。是れに反して反抗と云ふ言葉は、前項にも言つたやうに、聞くだに慥かならぬものを抱藏する

やうに響くのであるが、併しそれは暴なる反抗のことであつて、正しき反抗寧ろ之れを歓迎すべき理由がある。例へて見れば、こゝに一家の従僕がある。性質温良の人であるけれども、不幸にしてその主家が無道であり、家法が正しからざることに慨して大に之れに反抗する場合があるとする。斯る反抗には正當なる道理があるのであるから決して悪事でないばかりでなく、若しも此の道理ある反抗が效を奏して主家の禍ひを轉じて福となし、惡を改めて善となすことが出来たとすれば此の上なき仕合せである。故に服従必ずしも可ならず、反抗必ずしも不可ならず、兩者何れも時に取つて必要なる具たるを失はぬのである。

前にも云つたやうに、服従とひふことは之れを大にしては人民が國法に従ひ、之れを小にしては従僕が主人に對して従順する。總べて此の間に含有される譯である。若しも吾人にして一朝此の服従の觀念を失ふ、その常道を逸するが如きことあらば、國家には法が行はれなくなり、社會に主従長幼の序が紊れ、家庭には圓滿平和の美風が缺けて、吾人の生活は社會にも家庭的にも甚だ殺風景なものになつて仕舞ふであらう。されば、服従すべきの位置にある人は、道理に判斷して不平不足のなき限りは必ず自ら従順の道を守ることが義務であると心得るがよいのである。

勿論その服従に就いても、自らの服従すべき最上の待遇や命令が果して善なるか悪なるかをよく識別しなければならぬ。而して此の識別が却々の難問題で、命令者が正しと考へた事でも、被命令者から見ても正しからぬと思はれる場合もある。又た人間は萬能を期する譯にゆかぬから、下に下す命令が悉く正當のものであると云ふことも出来なければ、悉く良規を定めると云ふことも不可能である。否な、動もすれば、杓子定規に流れることもあれば、又た杓子定規と知つて之れを使用する場合もある。極端の例を引けば、長上が家従に對し、暑い夏の眞中に火鉢を用意せよと云ひ、寒い冬の旦に團扇を持つて來いと吩咐ぬとも限らぬ。是れ等の吩咐は道理のうへから推ば間違ひで、常識から申せば氣狂ひ沙汰であるけれども、併し左程の命令をするには、何か所存あつての事かも知れず、殊にその事柄が重大でない限りは先づ之れに従つて置くと云ふ位りの餘裕を存したいものである。水戸の義公會つて曰く『主と親とは無理なるものと知れ』と。服従すべき者の側から觀れば、兎角長上は無理を云ふやうに思はれ、實際に於て無理なる場合もあるのであるが、併し部下を統一し、足並みを揃へやうとするには、時に無理なることも言ひ、無理をも忍んで貰はねばならぬ時もある。義公の如き賢者も、無理を認めやうとする言葉あるは、國

法を定め、家憲を立てる上には絶対の服従を定めねばならぬ必要あるが爲めであらう。

斯く述べ來ると、服従ばかり必要になつて、反抗を用ゆることが無くなつて仕舞ふやうになるが、決してさうではない。多少の無理な命令でも之れに服従すると云ふのは、道理の上からの判断の結果には非ずして、長上を敬愛する念から、甘諾するに過ぎぬ。故に無理なる命令の受諾も程度問題で、若しもその指揮命令の事柄が重大のもので、然かもそれが道理に適せずして長上に不爲めなりと思惟する場合には反抗の必要が大に生じて來るのである。況んやその反抗が家に取りて災害を去り、國に取りて擾亂を防遏する底のものであつたならば、反抗も大に有益なるものと謂はねばならぬ。

然らば如何なる場合に反抗を必要とするかと云ふ問題になるが、之れを述べる前提として法と情との二者の區別を明かにしておく必要がある。即ち法の上から論ずれば、長上の命令は絶対に服従しなければならぬが、情の方から申せば、假令長上の命令でも、道理に背きたることならば之れに反抗しなければならぬこともある。併しながら、理屈は何うあらうと、長上に對して反抗が行はれると云ふ事態そのものは既に變である。此の變が常に無し得るとせば、其の極は主従上

下の差別もなくなる道理だが、左様な結論に到達する處の反抗は社會の秩序の爲めに願はしくもないものである。故に反抗には法と情との合理的の差別が大切で此の差別を誤る時は反抗の價値を減殺するのである。

例へば前に述べた、多少の無理を忍んで服従するのも命令者を敬愛する情の許容である。彼の武士道の精華として今日猶ほ人口に膾炙する赤穂の四十七士が演じた行動は、如何にも忠臣義烈の龜鑑とするに足る事柄ではあるけれども、要するに彼等は情に於て反抗して吉良義央を殺したので、法には背いた行爲である。若しも時の幕府の當局が、所謂喧嘩兩成敗の裁斷をなしたならば彼のやうな結果には陥らずに終つたであらうが、淺野長矩が殿中に於て吉良と忍傷の抜刀したる違法を責めて之れを所罰し、吉良には何等の制裁を加へなかつたと云ふ片手落の裁判をやつたから、忠臣たるもの君の斯の如き耻辱を忍ぶことが出来ないとなつて遂に法を犯して復讐したのである。詰り義士は情の爲めに、法を犯して反抗を試みたけれども、二百年後の今日まで忠臣義士の的となつてゐるのは、その反抗が合理的であつたからである。故に一方が悪い場合の反抗は、常にその反抗の價値が絶無ならざるのみならず、更に相手方が非常に悪い場合は反抗が却つて大

なる必要を觀するに至るものである。

猶ほ一つ例を擧ぐれば、少し事情は違ふけれども、萬延元年三月櫻田門外の變なども反抗の結果と見ることが出来る。事件は時の大老井伊直弼を水戸の浪士が櫻田門外に待ち受けて之れを殺害したのである。而してその殺害者たる浪士を賊とするか、將た亦た義士とするかは議論のある處で、若し井伊大老の處置が殘賊であるとすれば彼等は義士であるが、之れに反して井伊大老は正當の仕方をしたもならば、彼等は賊子の名を蒙らねばなくなる。元來彼等の論ずる所に據れば幕府が外國に對するは一國の大事である。將軍の職に在る者が天子の命令を奉じて其の事を決するのが當然の仕方であるのに、之れを聞かうともせずして外國に返答したのは井伊の仕方が悪いのであると云ふのである。然るに井伊大老の方では、幕府の政治に對しては一々朝廷の命を奉ずるに及ばぬと云ふ趣意で、遂に外國と假條約を締結した。此の專斷の處置を見るや、當時の有志家は口を極めて其の横暴を論じて世上が却々喧しかつたので、井伊大老は俄かに近衛、鷹司等の公卿を罰し、天下の識者浪士等を捕縛し、橋本左内、頼三樹三郎、吉田松陰、梅田源次郎其他數名の志士を一網に打ちつくしたから、慷慨家はいよく伊井大老の暴戾を憤つた。而し

て此の上に猶ほ一議論の起つたのは幕府へ攘夷の賜勅があつたと同時に、水戸藩へも勅諭を下されたのに、幕府は水戸藩に此の勅諭を返上せよと命じた。が水戸藩は此の命令に従はなかつた。然るに井伊大老は却つて其の命令に反抗するものを捕縛して罰したから、水戸藩士は承知せず法には幕府に服従しなければならぬが、情に於て反抗を餘義なくされて、遂に十八名の決死隊が申合せ。上巳の登城を機會として白晝櫻田門外に於て井伊大老を斃すに至つた。而して此の十八名は其の際に討死し又たは、其の後に至りて戮せられたけれども、當時の賊徒却つて明治の今日は志士國士として贈位され、神に祀られてゐる。

以上は何れも極端なる事例で、且つ普通の場合には當筈まらぬけれども、總じて服従は道理正しきを是とするが故に、長上に對してはなるべく服従して間違ひなきものである。併し此の間に是非善惡を判別することが肝要である。而してその結果は長上の命に無道のことあれば反抗の必要を認めて來ることになる。併しながらその反抗は必ずしも復讐ではないのであるから、極めて穩かなる所爲に訴へるを要する。對者を怒らしめず、又た争論にも及ばぬ範圍に於て之れを改善に導くやうにありたいものである。詳言すれば、反抗するとも反抗の模様を表面に露はさず、圓

滑に改善を待つと云ふ態度にありたいものである。斯くの如き穩健慷慨の態度に對しては何人も反省を速かにするものである。然して左様な優良なる態度は之れを平素の赤心の誠意とに俟たねばならぬので、事が起つた時、俄かに左様しやうと思つても平生の心懸がよくなければその功を奏することはむづかしいのである。平常赤心あり誠意ありて事に當つて居れば、いざと云ふ場合それが非常の力となつて自ら助けることになる。

商人と社交

社交は吾人の最も必要なる義務であると共に權利である。予曾つて經濟の根本は交際に在りと喝破した經濟書を読んだことを記憶してゐるが、吾人の交際は眞に左様な廣義なものであつて、何れの階級如何なる方面の人に於ても缺くべからざる生存上の必要條件である。蓋し社會は人類に依つて經營せられ、而して其の安寧は吾人の和衷協同の努力に由來するものとせば其處に必ず交際が伴はぬばならぬからである。然して交際が社會に必要視せらるゝ範圍は極めて廣汎で、之れも一局部若しくは或る種類の人に限るべき性質のものでない。殊に商人にあつては、其の職能

が既に無限の廣き範圍に有無相通じ、以て人類生活の利便と幸福と増進するにあるのであるから従つて其交際は、愈々廣大されねばならぬわけである。

そこで世間ではよく、交際の上手の人は世渡がうまいとか、交際が下手の爲めに立身出世が思はずしくないと云ふことを耳にするが、此の交際の上手下手と云ふのは一體何を標準として斷定する區別であらうか。予は之れが解釋に苦む。俗に申す人は感情の動物であると云ふ處から、感想を唯一の標準として之れを定めるとせば餘りに淺薄の見會を免れぬし、然らずとせば一寸標準の立てやうがないと思ふ。斯くの如く考へ來れば交際の上手と下手との定義が甚だしく面倒になる。併し強いて案ずれば普通世間で交際上手と言はるゝ者は他人と相交る場合、其の對者をして何となく愉快に感ぜしめる分子に富みたる人、俗言せば人好きのする人を指すものなるべく、交際下手とは全く其の反對の人を稱するものであらう。果して然りとせば、外形に現はれたる此の兩様分子の多寡に依つて幾分か國際上の上手下手がないでもなきやうに思はれる。

詳言すれば、所謂交際上手と目せらるゝ程の人達の交際振を注意して見ると、圓轉滑脫なる口吻を以て種々なる話柄を面白く持ちかけ、如何なる沈黙の者と雖も自然に固き唇を開かせられる

とか、或は尊卑長幼の別を區別して一々それに相應した態度應接を爲し、或は相手の性格に因り、又は其の場合を觀て時に眞面目の話もし、時には碎けた話をもなし、又た或る時は諧謔百出人の頤を解かしめて人をして自ら歡樂に酔はしめる程の手際を有つてゐる。斯う云ふ手際の所有者は其社交上に大なる便宜あるは勿論で、又た全く必要なる一要素たるを失はぬ。實際に於て吾人の交際に同じく自己の意志を表示する場合、穩かに靜かに而して圓滑に之れを言ふのと、烈しく騒騒しく突飛に而して不躑に之れを言ふのとでは、對者の感情の表裏の相違を起させるであらう。然らば即ち外形を巧みにして、上手に人と交ると云ふことは、交際下手と稱される人よりは大に優る處のあるは疑ひを容れぬ。故に表面の巧妙なる仕方は前に言ふ通り確かに交際場裡に於ける一要件たるに相違ないのである。

然れども予は左様に外形の巧妙を以て直に交際の要諦に觸れたる無二の方法と見ることが出来ない。何となれば、如何に外形が圓轉滑脫人をして快感措かざらしむるものがあつても、要するに开は僅かに一の『法』とか『術』とか稱する外面の所作であつて、社交上唯一の根本である處の精神に少しも觸れてゐないからである。吾人の總ての根本は精神でなければならぬ。精神より出

發せぬ吾人の所業は決して重要なる意義をなさぬ。此の意味に於て予は精神に根ざさぬ外形の交際振りには満足することが出来ないのである。

予の思惟しつゝある交際上の要旨は、事に當つて切實に考へること、人に對しては聊かも誠意を缺いてはならぬことと云ふ點に存する。即ち精神を専らにし、相手の貴賤上下に拘らず、如何なる階級の人に對しても眞實に交り、言々句々、一舉一動、總べて自己の衷心から出ると云ふのが眞正の交際であらうと考へる。よく昔時の商人の間には嘘言を以て方便の如く考へ嘘を吐くことは當然のやうになつてゐたが、社會道德の進歩したる今日の商人に左様な心得違ひがあつたならば其の事業も其身も自滅の淵に投げ込まねばならなくなる。世に至誠ほど根深く偉大の力を有するものはない。此の至誠を吐露して偽らず飾らず、我が衷情を披瀝して人に對するならば縱令法や術に不得手であつても又た如何に無口な所謂交際下手な人であつても、必ずや我が相手を感動せしめることが出来ると思ふ。何程巧妙に喋舌つても其の心に至誠を缺いての談話ならば遂に相手をして輕薄の感を禁ぜせしむる事が出来ないであらう。故に予は交際の秘訣は唯一片の至誠に歸着すると言ひたいのである。此の意味からして、商人が顧客に對した時、偽らず、飾らざら

る自己の衷情を流露し、その對座の瞬間に於て我が此の心を先方に打ち込んで仕舞ふ事がされたならば、百の交際術千の社交法萬の商賣語を用ひたよりも、遙かに超越した結果を收得する事が出来やうと思ふ。

然り、而して今日は一般に知識の進歩する程に個人の道德心の向上が未だ伴はぬ憾があつて、人々は唯だ口先計りで誤魔化し、兎角心の誠實を缺く風の見えるのは嘆すべき現象である。這是社會的の制裁に訴へても其の弊習を矯正しなくては駄目だ。至誠に依頼しなければ到底世に處することは出来ないものである。虚偽は人を誤り世を傷ふ最大害物である。若しも世人が一様に此の點に覺醒して嚴しく制裁を加へるやうになつたならば、自然に習ひ性となつて何時かは人々が眞に誠を會得するやうになり、そこに眞實の共同生存を樂むことが出来やう。

吾人の交際は精神的至誠に根強く立脚しなければならぬこと前述の通りであるが、併し之れが爲めに外形の所作を全然排斥するものと誤解してはならぬ。若し慾を容さば精神の内的にも、所作の外的にも完了することが出来ればそれこそ鬼に金棒である。そこで私は試みに交際學とでも稱する一科目を設けて社交に關する綱目を科學的に研究したならば、恐らく容易に盡さざるの

があると思はれる。併しながら左様な研究は予の如き者の畑違ひであるから、茲に幾多の細節枝葉に亘つて述べ立てることは出来ぬけれども、必ずや此の外面の形式にも取るべく學ぶべきの方法はあると思ふ。

何人によらず自己の意志を表示する場合には、形式に由るに非ざれば或る程度までは相手に判断させがたきことがある。而して此の形式を種々に研究したものがやがて交際術といふやうなものであらうが、術の語は何となく語弊あるやうなれども、若し其の形式が心のまゝを形に表したものとせば一向に差支へはあるまい。例へば集會の場合などに、なるべく談話を切らぬやうに何か話柄を考へ、人に不満を懷かせぬやういろ／＼なる方面に苦心することが必要である。何時も同じやうな話ばかりして居れば、相手を厭かせて仕舞ふ。さればと云つて相手を厭かせぬ様に力めるには自分で何も彼も知つてゐなければならぬ。之れは餘程多方面に興味を有つた人でなければ望みがたき事である。又會合にしても、各種各様の別があつて、國家的の會合もあれば社會的の會合もある。友人的の會合もあれば家族的の會合もある之れ等は其の場合々々に應じて性質を異にするのであるから、此の席に到る者はよく其區別を辨へて應接、態度、話柄等その他すべて

その場合に適應するやうにしなければならぬ。社會的會合に家族的會合の心持で居たり、國家的の會合に友人同士の心持ちでゐたりしてはすべてが頓珍漢たるを免れぬ。斯くの如き公私の場合を混淆して顧みぬ行爲を目して磊落不羈の爲體面白しとなす如きは大間違ひの沙汰で、少なくとも私は之れに與することは出来ない。談は大分商人を離れて一般の交際に及んで居るが、併し眞理は何れに對しても一つである。之れを斟酌變通して宜しきに適合せば何人にも當て敵るものである。商人同士の交際にも商人が顧客に相對した時にも前述の事柄は悉く必要である。至誠を本とし、縱令形式の所作を用ゆるにも、その形式は中心から出た處の形式を以て人に接するならば決して對者に悪感を催させるが如き事なくして我を歓迎するであらう。唯だ注意すべきは精神的至誠は遂に厭くことなけれど、表面の形式は動もすれば嫌焉される事がある。故に形式は之れを種々にすると云ふことを忘れてはならぬ。

商人と言論

物を賣り、物を買ふ渡世の商人にあつては、口舌は實に資本の一種である。何故と云ふに、其の

口舌の使ひ方一つで、自己の賣買が圓滑に成立ち、それに依つて利益が獲得せらるるからである。否口舌に依つて、利益を得るは商人ばかりでない、一般も同様口舌の働きの爲めに限りなき利便と幸福とを享けつゝある。併しそれは口舌の可い方面から觀た話であつて、半面には亦た此の口舌が禍ひの種となつて意外の損失、迷惑を醸すことがある。されば諺にも『口は禍ひの門なり』と云つてゐる。又た俳人芭蕉はそれを『ものいへば唇さむし各の風』とうまく文藝的に諷してゐる。何れも悪い方面から觀た戒めである。斯様に口舌は善惡兩面の働きを有つてゐるので、詮ずる處その使ひ分けの巧拙に依つて、善にもなれば惡にもなる。儲けもあれば損もある。仕合せにもなれば不仕合せにもなる。故に之れが使用は餘程注意しなければならぬと云ふことになるのである。左様に口舌は吾人に吉凶禍福の結果を分つ重大の働きをなすものであるから、之れが使用に充分の注意を拂はねばならぬが、單にそれを使用すると云ふことには固より遠慮は無用である。口は禍ひの門かと云つたのは、輕卒に口を開けば思はぬ禍ひを招くから氣を附けよと戒めたに過ぎないので、何でも喋つちや不可ないと云つたのではあるまい。若しもは禍ひの門でばかりあるならば、之れを固く閉ぢて開かぬに如かぬと云ふことになるが、啞でない限り無言の行は到

底人間の堪え得る所でない。然も一面之れに係つて利便幸福を贏ち得る以上大に『口舌は福の門』とも稱さねばならぬ。故に私は、口舌に對し禍ひの門ばかりあつて、福の門なきは片手落ちの沙汰だと思ふのである。同時に禍ひの門ばかりを知つて、福の門を知らず、何でも喋べらず默然つてゐるに限ると云ふ卑屈退嬰の態度を排するものである。

吾人は從來喜怒哀樂共に色に現はさぬを以て稱すべき人の態度としてゐるやうに、感情の抑制と云ふことには可なり長き鍛錬を積んで居るので、之れが自然の習性となり、何事にも控へ目を保ちて遂に口舌の如きも故意と容易に使はぬと云ふ風がある。感情の抑制も結構であり、控へ目に事をするると云ふことも悪くはない、併し、故意と口舌を使はぬと云ふやうな遠慮は全く無意味である。物の遠慮は謙遜の意味にも取れるが、その度を越せば卑屈になる。故に控へ目とか遠慮とか云ふことに餘り重きを置き過ぎると總べての行爲が不徹底になつて却つて結果が宜しくない。默すべきは默し、談すべきは談ずると云ふ風でなければならぬ。蓋し是れ眞の遠慮謙遜の意義に通ふのである。然してその口舌は、禍ひなる言と、福なる言とを識別し、禍ひなることには飽まで默し、福ひなることには益々談ずると云ふ方針を取れば宜いのである。然して禍ひなる言と福

なる言とを識別するの要諦は、唯だ一言一口と雖も之れを妄りにしないと云ふ點にある。私は此の見解から、私の處世接物の綱領の一つに『口舌は福禍の因て生ずる所の門なる故に片言隻語必ず之を妄にすべからず』としてゐる。盲言は恐るべく戒むべきもので、禍の門を造るは實に此の盲言の力である。

司馬溫公が處世の要訣を説いて『妄語せざるより始まると』云ふてゐるが、之れ即ち私の『片言隻語必ず之を妄にすべからず』と云へると同じ意味になるのであつて、人間處世に必要な言語は何如に澤山喋つても妄言さへしなければ決して差支はないのである。思慮深く識見高き人の言語は如何に多く聞いてゐても飽かぬばかりか、益々尊敬の念を高めるものであるが、無分別な底級の人のお喋りは少時の間でも馬鹿らしくウンザリするものである。前者は言語が有益なるため、後者は妄語ばかりで無益なる爲めである。前者は福の門であり後者は禍の門である。

元來言語は、人と人との間に意志を通ずるの必要から起つたものであるから、唯だの一時でも之れが無かつたならば、人生の要事は少しも辨することが出来ない譯である。それほど言語は人生缺くべからざる有用なものであるけれども、一面には又た大に禍ひの因となるのであるから、

吾人はよく此の福禍の岐かるゝ言語を識別して、苟くも不利なる妄言の使用は断じて慎まなければならぬ。殊に商人は種々なる客に接し、その客毎異なる要求や、利害や、感情を言語に依つて埒明けてゆかねばならぬのであるから、自然口舌を多く働かせることになる。併しながら妄語を發すると云ふことは罷めねばならぬ。昔から商人の間には嘘言も方便、賣ることの目的を達する爲めには多少の嘘言は已むを得ないと云ふやうに、自ら都合のよい解釋を下して一時を糊塗すると云ふ風があつたやうに思はれるが、それは大間違ひである、決して嘘言などは方便にならぬ。嘘言は確信ある説明なきに窮して出鱈目を並べるのであつて、僥倖して對者がそれを觀破するの明を缺きたる時のみ胡麻化し得るのである。斯くの如き卑劣醜態なる所業は信用を看板にする手前断じて容すべからざるもので、彼は此の不信なる口舌に依つて既に世に葬らるべき禍ひの門に道入つてゐるのである。

私なども平生甚だ多辯の方で、よくいろ／＼の方面の種々なる場合に口を出し、或は演説なども所嫌はずにやるので、知らず識らず言ひ過ぎた爲めに、人から屢々揚足を取られたり、笑はれたりすることがある。併し私は如何に揚足を取られても笑はれても、一度口にした言ふ以上は、

必ず心にもないことを言はぬと云ふ主義である。従つて私自身では妄語したとは思つてゐない。或は世人には妄語と聞かれる場合があるかも知れぬが、少くとも私だけは確信のある所を口にしたり積りである。故に私は怯めず憶せずその所信を大に談論するのである。

口舌は禍ひの門であるが、唯だ禍ひの門であるからと恐れて一切口を閉ぢて開かなかつたらばその結果は何なる。必要の場合に必要な言語を使はなければ意志の疏通を缺き、所用を辯ずることが出来なくて萬年徹底することなく有耶無耶の裡に葬られて仕舞ふであらう。よく寡言黙考する人を如何にも思慮あり沈着ある態度のやうに言ひ、饒舌多辯なる人を輕跳浮薄なる痴者のやうに申すのであるが、之れは寡言黙考すれば誤れる言語が少なく、饒舌多辯なれば自然間違つた言葉の屑が出る。そこで伶俐の者は多く語らぬ、愚かな者は無暗に喋べると云ふやうに解されてゐるからである。併し、單に言葉の屑を出さぬ用心の爲めに多く語らぬと云ふだけでは、それは必ずしも伶俐の人とは云ひ難い何となればその言葉が悉く屑でなき、有要のものばかり吐露することが出来るならば、饒舌であり多辯である程結構であるからだ。但し、私は決して饒舌多辯を宜き事に申すのではない。言語には自ら程度があつて、徒らにお喋りするは固より感心致しがた

いけれども、無言の行も決して褒むべき事でない。口舌は禍ひをも招くが福をも誘ふものである。要はその言語の有要なるを擇ぶにある。

前項にも云つたやうに、私は多辯の爲めに可なり禍ひもあつたが亦た福を來したことをも經驗してゐる『口あいてはらわた見する蛙かな』などと云つて、よく喋べる者は腹の奥の底まで見透かされることを戒めてゐるが、併し、その喋べることが確信に有つてゐるならば、如何に見透かされても恐るゝに足らぬ。腹にもない嘘言を云つてゐるのならば、その奥底を見破られては困るが、腹のドン底から出る眞實の言葉ならば、言葉その物が腹わたであるから特に隠す必要はない。然り吾人の言語は直に腹わたでなければならぬ。即ち精神的の言葉でなければならぬのである。口と心が別々に歩いてゐると云ふことは人として甚だ忌むべきことで、之れは何うしても一致の歩調を取らなければならぬものである。斯様に考へると、吾人の言語は酷く責任を生じて來るので、妄りにお喋りは出來ぬことになる。勿論、妄りに喋べることが宜くないが、妄りならざるお喋りならばいくら喋つても厭ふ所でない。妄りなる口舌は禍ひを招くけれども、妄りならざる口舌は禍ひを來すことはない、即ち口舌は有用に使へば禍ひを變じて福とするの働きをなすのであ

る。吾人の口舌は此の有要の方面により多く働かせなければならぬ。

沈黙してゐては解らぬことでも、一寸口を開いた爲めに人の困難な場合を救ふことが出来たとか、或は能く喋べることが好きだから何かのことに就いて人に頼まれて口を利き、事物の調停をしてやつたとか、或ば口舌のある爲めに種々なる仕事が見つかつたとか云ふやうに、之れを大切に使用すればいろ／＼の福祉を招徠することが出来る。別して商人は平生限りなき顧客に對して満足なる取引をするのは大部分口舌の働きである。若し此の働き方が鈍かつたならば到底商賣の目的を達することは出来ないのである。故に諸君は、より多く口舌を働かすことが肝要であるが、併しその口舌は必ず有要のものでなければならぬ。商人が一時の方便に嘘言を吐くことの間違ひであることは前に述べたが、嘘言でなくとも妄りに喋り立てることも宜しくない。即ち心にもない言葉を並べることが決して對者の首肯を購ふ道ではないのである。一言一句確信を以て語ると云ふ言葉でなければ完全に同意を求めることは出来ない。お世辭や追従ばかりで顧客の心を奪へ得ると考へたならばそれは大なる誤解である。徹頭徹尾眞實の心の流露でなければ他人を聽従せしめることは出来ないのである。

一體商人は世辭と愛嬌が上手でなければならぬやうに言はれてゐるが、成程世辭や愛嬌は例へば物の色艶で必要には相違ないが、それも程度問題である。その度を越せば輕薄となり、嫌味となりて却つて對者の悪感を招くものである。凡そ顧客は必要に依つて物を買ふので、世辭や愛嬌の爲めに購ふものでない。此の場合彼の聞かんと欲するものは追従や甘言ではなくて、その購買の自己に有利なる。説明である。然るに多くの商人の中には、此の肝腎の説明を忘れ、或はその説明をなし得ずして、唯だお座なりの巧言令色を以て、その販賣を決しやうとするものがある。買ひ物に幼稚の時代は知らず、今日の如く進歩したる顧客はそのやうな甘い口車にはオイソレと乗るものは先づ少ないのである。否、その口車に乗らぬばかりか、左様なお迎へを危険なりとして見棄てられぬとも限らぬのである。故に商人の口舌は徒らに巧みならんよりは、親切叮嚀を第一にしなければならぬ。商賣の目的は物を賣りたるだけに未だ達せられたのではない、更に賣りたる物が顧客に満足されたる時に於て始めて完了するのである。斯ればその賣買の際には先づ以て顧客の利福と云ふことを考へて、之れに依つて親切なる忠言を試むると云ふことでなければならぬ。即ち口と心と一致して顧客の爲めを計ると云ふことである。斯くせば縦令やその言語が

多少不熟であつても、眞實なる力は必ずや顧客の心を動かして之れに首肯せしめ、同意せしめ、購買を決定せしめることが出来る。

眞實のない、口先きばかりの巧言は着け焼刃である、所詮脱落して役に立つものではない。眞實のない人はいくら口前が巧くとも、話の底に力がなく、人に感動を與へぬものである。その筈である。話の根本に何等の確信がないから。確信のない話は夢物語も同様で眞面目に之れを聴く人がないのである。商人は苟めにも夢語りのやうな根據のない、確信のない言語は斷じて慎まねばならぬ。

之れを要するに、口舌は實に禍ひの起る門であるけれども、又た福祉の因つて來る門でもある。畢竟するにその口舌の働きの如何に依つて吉凶禍福が岐かれると云ふことになる。故に福祉を招く爲めには多辯饒舌も敢て厭ふ所ではないと同時に、禍ひの起る所に向つては大に言語を慎まねばならぬ。即ち言ふべき事と、言ふべからざる事の見境に賢なることが必要である。又た中には一度言語に依つて禍ひを負ひたるが爲めに再び喋べらぬやと云ふやうな人もあるが、之れは藥に懲りて鎗を吹くの類で、さりとて憶病に過ぐると言ふものである。一度演じた失敗を再び繰り返

さぬ用心は元より結構である。が、それが爲めに怯えて黙り込んで仕舞ふは感心出來ぬ。それよりは、その失敗に鑑みて、今後は失敗せざる言語に依つて福を招くやうにしたならば、曩の失敗も徒爾ならず自己を仕合せに導くことが出来ると云ふものだ。

私なども従來屬々言ひ過ぎの爲めに思はぬ誹謗を受けたり嗤はれたりしたことは前にも言つた通りであるが、併しそれ等の言は吐裡にもないお座なりを喋つた譯でないから少しも疚く思つて居らぬ。又た此のお喋りの爲めに退引ならず仕事を引受けたものもあるが、これも自分の曾て言つた通り、若しくは確信した通りに兎も角も實行してゐる。今後とてもその所信を述べることに遠慮しない考へである。併しながら、述べる事柄に就いてはお互ひに慎重吟味しなければならぬ。苟くも禍ひあるべく思はれる所に對しては啞にならねばならぬ。人を刺し、世を益するものならば百萬の言語も之れを貴しとしなければならぬ。

言語は意志の表現であると共に、人格の表現である。どんなに有要の考へを持つてゐても、これを口舌に現はさなければ知る由もない。よく不言實行と云ふことを處世の要訣の一つであると申すが、併し之れは自分獨りに關する事の場合を言つたので、人間相互に關涉する事柄には

通用しない。

二五〇

徒らに自分を誇張し吹聴し過ぎることは固より宜しくない、それは先づその實を示す方が却つて人を感服せるものである。不言實行とは即ち斯う云ふことを言ふのであつて、如何なる場合にも喋らず唯だ働きさへすればそれでよいと言ふのではない。若しも不言實行を唯一の信條にしたならば、今日行はれてゐる商店の廣告などは大部分罷めねばならなくなる。何となれば、今日吾人の耳目に觸るゝ大部分の廣告は、何れも商店に好都合の言ひ分のプロパカンであるからだ。曰く『當店で販賣する商品は値段に於ても品質に於ても、一等である』とか、悉くこれ自家信用の手盛りでないものはない。

不言實行の主義から申せば、そんなことを言はずと、實行さへしてゐればよいと言ふことにならぬ。併しながら廣く世人を相手に自己を知らしむる爲めには何うしても自ら進んで披露しなければならぬ。唯問題は其の言ふ言葉と實とが伴ふてゐるか否かにある。若し實が伴つてゐる言語であれば至當の披露であるが、然らざるものは虚偽の吹聴である。此の虚偽の吹聴は必ず避けなければならぬ。それと同時に吾人の言語も實の伴はぬものは慎まねばならぬのである。

勤勞と報酬

勤勞に對する報酬と云ふことは何人も口にする言葉であるが、然かも此の言葉は、我々の受取方に依つては一寸不完全の點があるやうにも思はれる。それは、勤勞と云ふ文字が、一種強要的の意味を含むやうな感じがするからである。即ち我が本意ではないけれども勤めて其處に任ずる、嫌やだけれども勤めだから働らくと云ふ、或る強要若しくは制裁の下に服従すると云ふやうな氣味合があるやうに思はれる。但し斯くの如き解釋は、所謂勤勞なるものゝ眞意義でないことは勿論であるが、單に文字の上から見、又た實際勤勞に對する世人多くの觀念なり態度なりから觀察する時は、何うも此の勤勞を以て或る強要に依る據所なき働らきの意味に取扱はれて居はしまいかと思はれるのである。果して然らば勤勞なる意義を誤れるものと云ふよりは、人間本來の約束であり天職である處の尊き働らきの精神を没却するものと謂ねばならぬ。

抑々人の此の世に生れ出でたる以上、そこに生存の必要があり、生存の必要ある以上、そこに生存上に必要なる何等かの手段即ち働らきが必要になつて來る。即ち何等の強要なくとも、制裁

なくとも我が生そのものゝ必要からそれに應ずる働らきをしなければならぬのである。若し強い得たる我々は、その生の存続と共にその力を働かすと云ふことは當然の約束を履行して居るに過ぎないので、之れをしも生の強要であると言はゞ、予は寧ろ生なるものゝ發現を呪はねばならぬ然しながら我々には生と共にそれを維持し保存するに足る處の力を與へられ、我々は此の力に依つて我々の生存に必要な働らきをなし、然かもその働きたるや、決して他の強要ではなく、單に生あるものゝ必要な作用として行はれるのである。斯の如く我々の勤勞を根本に遡つて考へる時は、人の勤勞すると云ふことは人間自然の約束に従つて居るに過ぎぬと云ふことになる。既に我々の勤勞は人間自然の約束事である以上、その勤勞を厭ふ如きは取も直さず人たる資格を缺いたものであつて、斯くの如き人外の不具者は我々の生活上有害無益の長物として大に排斥しなければならぬ。縱令勤勞を厭はぬまでも、之れを一種の強要がましく考へると云ふ事も誤つて居るので、そのやうな勤勞は神聖のものと云ふことは出来ない。神聖な勤勞は寧ろそれを樂み喜んですると云ふのでなければならぬ。然かも世間には此の神聖であるべき、自然の約束である

べき勤勞を意識しないで、頼まれ事でもするやうに、出来ることなら遊んで居たいけれども、さう云ふ譯にも行かぬから餘儀なく仕事をすると云ふやうな勤勞振りをして居る人はないであらうか。予は甚だ疑ひなきを得ぬものである。

若しも人が此の世にあつて、何事もせずに茫然暮して居るものとすれば、勤勞は強ひて己を勞することになるが、苛しくも勤勞は人たる者の處世上必要なものであると云ふことになれば寧ろ進んでその最善を期さねばならぬ筈である。

然り而して人の此の世に立つて一人前の本分を盡すには、賢不肖貴賤の別なく勤勞を離るゝと云ふことは出来ないのはその意義の解釋に於て明かである。唯だその人の能力に由り若しくは境遇に因つて大小廣狹の相異があるばかりである。或は我が一身を始末する勤勞だけしか出来ぬ者もあらう、或は我が一家を經營するだけの勤勞をする者もあらう、或は一族若しくは一郷、一地方一國更に世界と云ふ廣き範圍の爲めの勤勞を敢てする者もあらう。之れを要するにその人の力の大小に因るものであつて、冀くは何人もその勤勞のより大ならんことを望むべききである。然して報酬はその勤勞の比例に伴ふて來るものである。

即ち智識を勞した勞力の大なる程報酬も大である。卑近な勞力には従つて報酬も少ない。例へば一つの工場内に於ても、智識を要し、責任の重き技師の勤勞に對する報酬は、單に定まれる仕事に従事する職工の報酬よりは多いと同様である。但し、此の報酬は勤勞に對し直ちに來る場合と、容易に來ない場合とがある。之れは主としてその勤勞の性質に因つて異なるので比較的小さな勤勞の報酬は直に來るが、大なる勤勞の報酬は遅いのである。例へば商業でも小規模の商業はその利益を速かに見ることが出来るが、大規模の商業はその結果を見ることが遅い。工業でも單に勞力を賣る職工の報酬は直に得ることが出来るが、大きな勤勞を拂つてゐる資本家の報酬は遅いのである。更に進んで國家社會と云ふやうな廣く大きな範圍に勤勞する報酬は容易に之れを求めることが出来ないけれども、その代り來る時は纏つて來る。人の信用の如きも、變體ながら報酬の一つで、之れ等も容易に得がたきものであるが、その來る時は纏つて得るものである。人に例へて申せば、孔子や孟子の如き、仁義禮智信の行爲はその節に適ひ、處世接物の宜しきを得た大聖人の勤勞は數千年後の今日まで嚴存して無限の報酬を得つゝある。又た菅公や楠氏の如き忠烈なる勤勞の報酬には末代までも光輝を放つて居る。斯くの如く報酬は遲速はあつても必ずその勤

勞に比例して來るものであることは疑ひない。然り而してこゝに一言を要すべきは、報酬は勤勞に對して必ず來るべきものであるが、我々の勤勞は必ずしも此の報酬のみ唯一の當事にすべきものでないと云ふことである。換言せば我々は報酬を得たい爲めに勤勞するのではなく、人間自然の約束である勤勞する結果として報酬を與へられるのであることを知らねばならぬ。此の點を誤ると勤勞をせず報酬のみを得やうなどと云ふ不料見が起るのである。そこで報酬に拘はらず勤勞を以て本位としなければならぬ。

能く自分は之れ程勤勞してゐるのに報酬が少ないと云ふやうなことを言ふ人があるが、之れ等は報酬を本位として考へるからの不平で、若し仕事を本位としてゐたならばそのやうな不平不足はない筈である。心の不平不足は總てその勤勞の上の不忠不實となつて現はれ來るものであつて、遂にその人は自己の仕事に緊張を缺くことになる。即ちその人は報酬に萬足せぬ上に人間自然の約束にも相反する不具者とはなるのである。人の勤勞に對し相應なる報酬を知るの明なき者の賢からざるは勿論であるが、徒らに報酬の少なきを慨して自己の天職を贖ふする如きは極めて愚かなる業であつて、斯の如き人は得るに従つて心驕り到底自己の勤勞に忠實なることの出來ない人

である。勤勞には必ず報酬がある、縦令それが一時に現はれぬにした處が、何時かは見出されてその眞價の正當に評價されることは疑ひない。所謂徳孤ならず必ず隣ありとか、或は積善の家に餘慶ありとか、何れ善良なる勤勞は如何に隠れても必ずやその尊き光明を現はし來るものである故に我々の勤勞に對する報酬は望むべきものでなくて生ずるのを待つべきものである。斯う考へれば報酬が縦令少なくとも不平不足を思はずして我が天職に忠實なることが出來やう。所謂身を殺して仁を爲すとか、身を棄て、義をなすと云ふやうに、古來人の爲め世の爲めに努めると云ふ最善の勤勞、最大の美德を行ふた人々は決して報酬の如何などを考慮してゐたのではない。然かもその英名の勳績と共に竹帛に垂れて永劫に芳しき所以のものは全く人間としての自然の約束たる勤勞に専念忠實であつたに外ならぬのである。

以上は勤勞に對する報酬の大體話であるが、之れを商人の上に考へるに、その意味は同様であらねばならぬ。即ち商人が日々營業に従事するのは商人としてと云ふばかりでなく、一個の人間としての勤勞を行つてゐるので、従つて報酬はその勤勞に準じて來るのである。殊に商業は一個私の利益の爲めに營むのではなく、社會生活の利便の爲めに存在すべきものであるのであるから、

その勤勞の意義は極めて深大である。即ち商人の勤勞が公共的であるだけそれだけ社會生活の利便が多くなる勘定である。而してそこが商業の尊器であり、商人の責任ある點である。若し商業が社會の利益を壟斷する機關となり、商人が私利のみ營む傀儡であるとすれば世に商業程不便なるはなく、商人程不都合なるはないと云ふことになる。有無相通じ、需用供給の調節を圓滑ならしめるとを以て使命とし、此使命を果す勤勞に對して報酬を得るその報酬が商人の利益でなければならぬ。此の頃のやうに物價が騰貴した、そこで商人に非ざる有志の人々が商人よりも廉價なる物品を提供すると云ふやうな現實は商人に取つては、大に反省しなければならぬとである。此の生活困難と云ふ社會上の大事實に貢獻しやうと云ふとは、商業本來の精神で此の精神を以て相對せば今日の物價を調節し得べき餘地があると思ふ。

娛樂の必要

我々の娛樂に對する解釋が大分開けて來たが、それでも何うかすると猶ほ未だ娛樂を無用なもの甚だしきは弊害あるものとして之を排斥せんとするものもある。之れ等の無用論者は案ずるに

娛樂の意味を單に遊ぶこと換言せば遊惰に耽るものゝやうに考へてゐるからであらう。これは聊か見當違ひの謬見と申さねばなるまい。抑も娛樂は吾等に一種愉快なる慰安を得せしめる上に必要なるものであつて、之れを單なる遊びと見ることは出來ないのである。金石に非ざる人間の精神にも體力にも一定の限りがある。否な金石で造つた機械であつても不斷無限に之れを使用することとは出來ない。況んや微妙の感情と繊細精緻な機能を有する。人間の身心を百年不休に働かせること云ふことは到底不可能である。そこで一定の休養を與へる必要があり、而してその休養方法をより愉快にすることが一層有効になる譯である。即ち娛樂は此の休養を愉快にする方法の一つである。されば娛樂を無用の沙汰と排斥するは理由なきことになるのである。併しそれは今も言つたやうに、娛樂の意味を穿き違へてゐるからの爲めであるが亦實際に於て日本舊來の娛樂には衣服の出來ないものゝ少なからず存してゐることも事實である。併しながら吾等の今日謂ふ所の娛樂は、人生生活に必要なとすべき善良なる意味のそれを指すのである。別言すれば、彼の歐米人等が『克く務め克く遊ぶ』と謂ふ、その『克く遊ぶ』ことを目標とするのである。斯様に説明したならば、無用論者には諒解が出來、吾等の有要論に賛成がして貰えるのであらうと思はれる。

人間は一面大に働き、大に成功したいと云ふ希望があると共に、その半面にはより大なる慰安を得たいと云ふ慾望がある。而して娛樂は此の慾望を満足させるに有力のものであるから、即ち活動に對する内助者とも言ふべき價值があるのである。そこで娛樂は人生に必要缺くべからざる事項だと云ふ結論になる。併しながら、我が國人の有する娛樂の方法には、新舊いろ／＼ありて其性質に善悪があるから、之れを採用する上に充分吟味せねばならぬ事勿論で、出來得る限り善良なるものを選びて吾等の慰安をより有効にしなければならぬ。

私は舊時代に生育した人間であるから、今日の少青年がするやうな、ベースボールや、ローンテニスや、短艇漕ぎと云ふ運動的娛樂とか、寫眞撮影や、撞球や獵銃と云ふやうな紳士的な娛樂は何一つ知らずに來た。さればと云つて舊來の娛樂たる書畫や骨董いぢりの趣味もなければ、茶事や歌道に遊ぶ風流もない。況んや俗曲を唄つたり、舞踏を試ると云ふ通人でなきことは勿論で此の點はまことに野暮の骨頂たるを羞るの外はない。一つは私の少年の頃から始まつて青年時代には漸く世の中が騒がしくなり、天下國家現在將來を思へば却々娛樂を求めてゐるなぞと云ふ邊のなかつた故もある。併し強いて私に求めらるれば庭園を好むといふ位のものである。此の路を

誘ふことになる。彼等が娯樂を室内より室外により多く有してゐることも、矢張りさうした關係からであらうと思ふ。又た室外に娯樂を得てゐるから従つてその娯樂は自然大規模になり公衆的になる。然り彼等の戶外娯樂には全く老幼男女の區別なく、他人數と共に殆んど吾を忘れて遊ぶ風がある。例へば休日公園などへ出かけて見ると、そこに集る人々の種類は異つても、遊ぶことは共同だと云ふやうに、誰も彼も皆喜々として各種の遊戯に共々打ち興じてゐる。又た大仕掛の野外運動なども絶えず行はれてすべて開放的なる處に彼等の特色が現はれてゐる。

然るに日本人の舊來の娯樂は兎角四疊半式である。成るべく屋内に納つて自己に附隨した少數者と相集つて樂むと云ふ位のもが多い。稱して上品の遊び、紳士の娯樂と云つてる書畫骨董の鑑賞や、詩歌俳偲の遊びでも、茶事や香合と云つてたやうなものですべて屋内で靜寂の氣分を味ひながら行ふのである。併しこれ等は善良の部で、善良ならざる娯樂に至つては言を避けねばならぬものが澤山ある。然して斯くの如き娯樂の範疇を造りたる原因は決して單純ではないけれども、吾等の實際生活がそれを助けてゐることも亦た否定されまいと思ふ。即ち吾等日本人の生活は、所謂長袖者流の昔を繼承してゐるので、之れを西洋人のそれに比せば其の繁雜面倒なること雲泥

の差がある。斯うした生活上のこだわりが、自然何事にも吾等を億劫がらせ、外へ出てもよいところを家の中で済すと云ふやうなわけで、その動作や舉止までが何となく因循になつて仕舞ふのである。尤も西洋人でも室内の娯樂は決して日本人に負けぬだけのものは有つてゐる。繪畫や骨董の娯樂も彼等の間には旺んである。併しながら彼等のさうした娯樂も矢張り公開的で、日本人のやうに孤獨的ではない。例へば日本人の骨董いぢりをする人では、所有してゐる程の品物を室中へ竝べ立てゝゐるは稀れで、その趣味の深い人ほど裝飾の調和と云ふことに重きを置き、高雅蕭洒の氣分を失はぬやうにと必要でなき名品は悉く之を庫底に納めて置くのである。然るに西洋人は必要な品物まで矢鱈に室内へ竝べ立てゝ置くと云ふ譯ではないが、甚だしく調和を失はぬ範圍に自己の所藏する名物をなるべく豊富に飾つて多くの人に見せやうとしてゐる。日本にはまゝ、資力あるに任せて、天下の名器を澤山に蒐集しても之れを公開する人は少ないのであるが、西洋では出来るだけ之れが公開の方法を講じてその樂みをより多くの人に頒ち、併せて世の利益に資さうとするのである。然して是れみな彼我人情風俗生活の相違より來る習慣の違ひであるが、斯うした相違が單に娯樂の上ばかりでなく、日常の仕事の上にも精神の上にも現はれ來ることに吾

人は留意しなければならぬ。

歐米人は非常に克く遊ぶから働くことも亦た克く働く。日本人は遊ぶことは徹底的でない代りに、働くことも亦た徹底を缺く憾みがある。歐米人は一心不乱に遊戯をするやうに、その平常の仕事にも熱中するのである。又た歐米人の娯樂が公衆的であり、共同的であるやうに、彼等の行動は社會的であり民衆的である。斯う云ふ人達に於てこそ始めて名實兩全の共同團結が造られるのであつて、彼の地の勞働運動が常に國家社會の問題たる權威を恣にすること決して偶然ではないのである。以上述べたるが如き意味に於て、吾等の娯樂を單純なる遊びと解して之れに冷淡なるは甚だしき時代錯誤と言はねばならぬ。克く務め克く遊ぶと云ふことを心とし、娯樂の場合もその全力を擧げ、務めの時にも亦その全力を傾けなければならぬ。遊ぶ場合に精神を籠めるのは、聽て仕事の場合にも精神を打ち込むと云ふことになる。惡でなき限りは何事にも心を一にして專心的にやる。兎を追ふにも全力を用ゆる底の覺悟がなければ事物の成就是期し難い。殊に娯樂の問題は國民元氣の消長にも關するところ大なるものがあるから、今後大に研究し獎勵しなければならぬ。近來は新教育を受けた人達が社會に立ちて大分娯樂の選擇が變つて來た、孤獨的な

屋內的の娯樂は公衆的屋外的の娯樂に移つて來た。此の變遷は極めて喜ぶべき現象で、願はくは歐米のそれに見るやうに、男女老幼共に此の娯樂に依つて潑瀾たる元氣が養はれると云ふことにありたいものである。斯くして我が國特有の早老者、若朽者を救ふことが出來たならば國家の爲めに大幸である。

小言の云ひ方

人に小言を云つたり、忠告をしたりすることは却々むづかしいものである。何れ小言や忠告は我が相手の過失や心得違ひに對して、その過失を再びせざるやう、その心得違ひを正しきに引戻すやうに致さねばならぬのだから容易でない。

何事も一本調子で押し通すことは出來難いものであるが、それと同様に此の小言や忠告も一樣にはまゐらぬ。人間社會はいろ／＼複雑なる階級や業體の種類や緣故に因つて形式されてゐるのであると同時に、人の氣もその顔貌の異なる如く千差萬別であるから、誰に向つても同一態度、同一の言語を以て小言を云つたり忠告したりすることは出來ない。自分が小言や忠告をしやうと

する相手の中には、同輩もあれば目上の人があるかも知れぬ。志を同うする他人や志を異にする親戚のあらうも知れぬ。又た境遇を同うする他人があるかと思へば、境遇を異にする親友があらうも知れぬ。斯やうに相手の異なるに従つて之れに加へんとする小言や忠告にはそれ／＼の興趣がなくてはならぬので、所謂人を見て法を説くが必要が生じて來るのである。是れ實に人に對する小言や忠告の甚だ易からざる所以で、親しい父子の間に於ても猶ほ惡事非行を責めるのは餘り好ましいものではない。孟子に『父子善を責むるは恩を傷ふの大なるもの也』とあつて、何の遠慮も隔意もあるべき筈のなき親子の間でも、小言や諫めをした爲めに、却つて恩を仇に思はれる場合が時にはある。況してや親子以外の人に對する小言、忠告の面倒なること推して知るべきである。

小言や忠告は左様に面倒なものであるけれども、その面倒を厭ふて之れを致さぬと云ふ譯にはゆかぬ。お互ひに人間交際をしてゐる以上、而してその交際つてゐる人々が聖人であらざる限り過失や心得違ひは先づ有勝ちのものと思はねばならぬ。此の缺點を矯正すると云ふことは直接には其の相手の爲めであるけれども、間接には自己の益にもなることで、所謂日他の利益がそれに依つて生じ、更に廣く考へれば、その過失を防ぎ、その心得違ひを正したことの爲めに、その相

手の働きが善良なるものになるとせば、それだけ社會の幸福を増進するとも申されるのであつたら決して面倒を厭ふて輕々に看過すべき事柄ではないのである。

故に諸君の部下に使ふ人達の上には勿論、縦令身寄親戚友人であらうとも、それ等の人々の行爲に誤つた點があると認めたらば、それを矯正することを自らの責任と感じ、進んで忠告の衝に當り、飽まで目的の貫徹に努力するの覺悟がなければならぬ。殊に商店の使用人達の過失に對しては店主たる者大に心を用ひ極力これが改善に力を注ぐべきである。然してその過失に對する小言に就いては何處までも慎重の態度を取り、相手の地位を異にし、境遇を異にし、年配を異にし、志を異にする程度に應じてそれ／＼の手段を變へる必要があること前述の通りだ。或は溫柔の態度に出で諷刺的にする場合もあるであらうし、或は正面から猛烈に攻撃する場合もあらう。左様にゆきかたは違ふけれども、結局過失を過失と覺つて改めさせる事が、過失を責むることの主眼であるから、方法は如何であらうとも、此の目的に外れぬやうにするのが過失に對する巧妙の譴責法である。

人の過失を責めるに第一に大切なることは責める人の心持である。若しも苟しくも憎惡の念を

挾んで責めるやうなことがあるならその小言も忠告も恐らく効果がなきのみならず、却つて時には意外の禍根を残さぬとも限らぬ。諺に『良薬は口に苦く、忠告耳に逆ふ』とか申して人には善悪を問はず多少の反感性を有するものである。例へば自分が如何に千萬言を費して苦心忠告しても、先方がその氣にならねば却つて反感を助長することゝなる。いや反感ばかりで済まぬ時がある。或は逆怨みをされたり、友人同士ならばそれが動機で綱交しかねぬこともあり、相手に依つてはその爲め危害を加へられるやうな場合もないとは言へぬ。又た相手に反感を起させぬまでも、責め方、忠告の仕方に依つては反對に先方は過失を辯護して、過失を過失と覺らずに終るやうな場合がないとも申されぬ。斯くの如く自分が折角親切の心を以て忠告してやるのに、相手はそれとも思はず反感を起して衝突いたり逆怨みをしたり、辯護をしたりしてその非行を改める風がないとすると如何にも残念に感ずると共に腹立しくも思はれるものである。よく喧嘩の仲裁に這入つた人々が、自分の理解を聞入れられなき爲めに反對にその喧嘩を買つていきり立つと云ふやうなことが小説本などに見受けるが、實際人の親切を親切と受けられぬほど張合なく口惜しきはないのである。そこで人を諫めたり責めたりする場合に於ける心持の根本條件としては、所謂『罪を悪んで人を悪まず』と云ふ態度でなければならぬのである。斯くすれば、縦令や相手が我が親切を受け入れず、我が言に聞かぬ場合があつても、その事自體が誤りであるから一層その人に對する同情の念は深く厚くなつて腹立しき心は起らぬのである。又相手に對する憎惡の念を一切捨て、唯だ／＼その過失に向つて極力改善を勸めるならば、多くの場合それに對して反感を起させるやうなことはないのである。稀れにそんなことがあるとしても、自分の心が正しければ『至誠天に通ず』で、我が傾注する赤誠は必ず相手の胸底に透徹して之れを諒とし、遂に過失を改めるやうになるであらう。若し斯くても猶ほ先方が之れを改めぬと云ふならば、それは未だ自己の力の注ぎ方が足らぬのであると思はねばならぬ。相手が極惡犖猛の性格を有せざる限り、自分が心誠意を吐露し行けば必ず良心に訴へて反省するに相違ないと思ふのである。故に人に忠告し小言を云はんとする者はよく／＼此の覺悟を定めてかゝらねばならぬ。

自分の部下、商店ならば店員に過失のあつた場合、これに小言を云ふことは店として何の雜作もないやうではあるが、實は却々面倒なものである。一寸の虫にも五分の魂とか。店員にも矢張り反感がある。殊に今日の若い人達は人格的に向上して自負心と自尊心に富んでゐる。これを昔

の奉公人に對する店主の叱責のやうにがみ／＼怒鳴つた處が承服させらるゝものでない。縱令自らの非を知つても、それを頭ごなしに拭却されてはツイ口返答がしたくなる。そこで店主はその小言を有効にするには他の場合以上に注意を拂はねばならぬ。元來店主と店員の關係は昔ながらの君主と家來のやうなものでないとしても、その日雇ひ手と雇はれ手との間柄の様なそんな單純な冷めたいものではない。苟にも店主となる店員となりて同一の業務に従ひ、共同の利益の下に働く程の深い關係がある以上は、兩者とも打ち解け合つた温かい間柄であらねばならぬ。況んや店主として店員の上に座し之れを指揮して行く身分にあつてはその店員に對する態度も心事も溫柔且つ寛大なるべきである。故に店員達に過失のあつた場合でも、その事柄の輕重を考へ、出来るだけ穩かに反省を促すべきである。例へば店員が仕事を怠るとか、粗漏にするとか、或は甚しく酒を飲むとか、又た或は女に溺るゝとかいふことがあるとすれば、その場合直接にその事を指して之れを責むると云ふことの必要なものもあるが、私の平生取りつゝある手段としては、左様な場合に際してその事を直ちに指示して責むるといふ遣り方よりも成るべくその者に對して間接に注意を與へてやるといふ方法である。例へば過失で何か道具でも破損した者があるとすれば、

私は其の者に向ふて『お前は何々の道具を毀したではないか』と眞向からは責めない。其の代り私は平素『すべての事に注意を怠るな、注意を怠ると事務を忘れたり、粗漏に流れたり、物を毀したりするやうなことがある』と斯う言つて誠めておく。それ故いざ道具を破毀したといふ場合になつて、私が直にその過失を責めなくとも『自分が道具を毀したのは非常に悪かつた。平素訓誡されてゐた所の注意を怠つたのである』といふ所に自ら氣が附いて、多くの者は云はるゝ迄もなく其の後は充分に注意を拂ふやうになる。私の此の方法は必ずしも過失を矯正する最良手段であるとは申されないが、私自ら實驗した所に由ると最も結果がよいやうに思はれる。

但し、如何なる過失に對しても以上の訓誡が良好だと云ふのではない。事と場合によつては直接に其の不心得を説き聞かせて反省を求めねばならぬ。例へば酒色に溺るゝ癖があるとか、甚しき心得違ひをしてゐる事があると云ふ、際立つて悪いことは心をこめて教訓する方がよいやうに思ふ、同じ過失の中でも悪い性質を帯びたものに對しては猶餘して置かれぬから、左様な時にはその事實を指摘して不心得を諭さねばならぬ。而して比較的輕き過失例へば仕事を怠るとか、物を粗略にするとか、出勤時間に遅るゝとかいふやうな事に對しては、それと事を明かに指示して言

ふよりは、平生に於て心の持方に就いて教訓を與え置く方が、過失の責め方から申せば一番效があるやうに思ふのである。

店主が店員に對する小言の態度は前のやうだが、今度は反對に店員が店主に對する場合のそれは何うであるかを考へて見たい。店主と雖も神様でないから絶対に過失なし、心得違ひなしとは申されぬ。否廣い世間には店員の眼にも餘るほどの過失をしてゐる店主もあるであらう。斯る場合に店員は之れに對して黙すべきか將た諫言すべきか。私は進んで諫言する方に賛成する。但し店員の諫言すべき事柄に範圍のあることは勿論である。开は店員と店主と利害を共にする範圍と見れば宜しい。併しながらそれ以外にも、事柄の重大なる場合は矢張り進言する方がよいのである。昔から長い物には卷かれろと云つて、主人の御無理を御尤もに聞いて來だ風があるが、此の御無理を敢行するは店主の誤りであること勿論だが、之れを御尤もに聞いてゐた店員の態度も誤りである。無理なることに承服するはそれを是認するも同様で、非行を助けることにもなる。苟しくも店主に無理なる非行があり、それが店主の爲めに有害なるものであつたならば、時に面を侵して諫止するほどの勇氣がなければならぬ。古語に『三諫して聞かれずんば去る』と云ふことがあ

るが之れは三度諫さめて聞かないやうな主人に愛想をつかして、去つて仕舞ふと云ふ意味ではなく、自分の諫める事は正しき道であり、何うしても容れて貰はねばならぬ事柄である。それを度々諫めても聞かれぬのは自分の徳が足らず力が足らぬからである。一旦信じて諫めた責任上自分の地位を去らねばならぬと云ふ、即ち地位を賭して諫言する所の極めて責任觀念の厚い態度を言つたのである。實に事と次第とに依つては自己の地位をかけても諫言する程の勇氣が必要である。又た之れほどの勇氣と誠意とを以て諫めるならば、甚だしき没禮漢にあらざる限り必ずやその至誠に動かされて正しきに反省するであらう。

店主と店員とは單に店員が勞力を提供して報酬を得ると云ふ關係ではなく、利害休戚を共にすると云ふ同舟不離の間柄にあるが故に、店主は店員の心事にまで立入つて訓戒もする。店員は店主の私事にまで直接間接にこれを助けると云ふやうな所に渾然たる兩者の愛の融合が認められる。私は此の美なる特長を何うかして失ひたくないと念ずるものである。殊に勞働問題の囂しき今日一層その感を深ふする。

友人や同輩間に過失のあつた場合には如何に之れに忠告すべきか。自分の同輩である、友人であ

る以上は、部下の者を戒めるやうな態度は取れない。私は若しそれ等の對者に大たる過失があり
を反省させねばならぬと云ふ場合には随分と聲を濁らして諫めもし、忠告をも試むとい之れふこ
とのないでもないが、併しなるべく個人の性格に立ち入つて餘り言へもしないし、又自ら進んで
言ひたくもないから、成るべく慎重の態度を取つてゐる。されど、相手の性質が磊落に天真爛漫
であるならば、一層率直に『君は近頃身持が悪い様子だが、チト慎んでは何うか』とか『誰は酒
を飲みすぎて素行が修らぬから、少し忠告したら宜いだらう』とかいふ位のこととは言へないこ
ともない。而して此の程度の忠告をしても相手の性質が前言つたやうに盛張りとした人であれば、
此の爲めに怒つて交際を斷つといふやうなこともあるまい。一體に私としては餘り左様なことを
人に言ふのを好まないし、又た人から言はれることを好まないから自ら過ちのなきやうにと氣を
つけてゐる。従つて人に對して強いて言ふよりは、時に應じて幾分先方へ注意を與へてやるやう
にする。例へば、某は餘り偏狭で人を容れられぬ、これくの缺點があるといふやうな場合には、
其の人に向つて直接『君に斯ういふ悪い性格がある』とは言はずして『人として斯くありたいも
のだ』といふ風に注意してやるのである。従つて私は多くの場合、友人同輩に對しての忠告は面

と向つて直言するといふことはなるべく避けてゐる。斯く申せば如何にも不親切らしく聞かれる
かも知れぬが、幸と今日までさうした必要のあつた友人達には私の此の解し得る程度の諷刺が利
き目があつて却つて此の方が宜いと思つてゐるのである。但しこれにもその事柄が重大である場
合は、直接にも正面からでも、時には鼓を打つて肉迫しなければならぬのである。唯だ如何に親
密な間柄でも、直言して忠告するといふことは餘程考へねばならぬので、折角の自分の好意も相
手は好意としてこれを聞くと云ふよりも、寧ろ曲解して仕舞ふ場合が多い。好意を以てして結果
が左様になつては好意が好意ならず、所謂最良の引倒しと同様なことにならうも知れぬから、此
の點を深く考へていたさねばならぬ。

大正十一年十一月廿二日印刷
大正十一年十一月廿五日發行

定價金壹圓七拾錢

編者

山田延彌

發行人

渡部六尺

印刷人

藤本兼吉

印刷所

中正社

東京市神田區宮本町五

發行所

東京市本郷區駒込林町十三
電話小石川四八八九番
振替口座東京五九三三五

合資大
會社法
館

503

174

終